8月號

婦人運動

第6巻 第7號





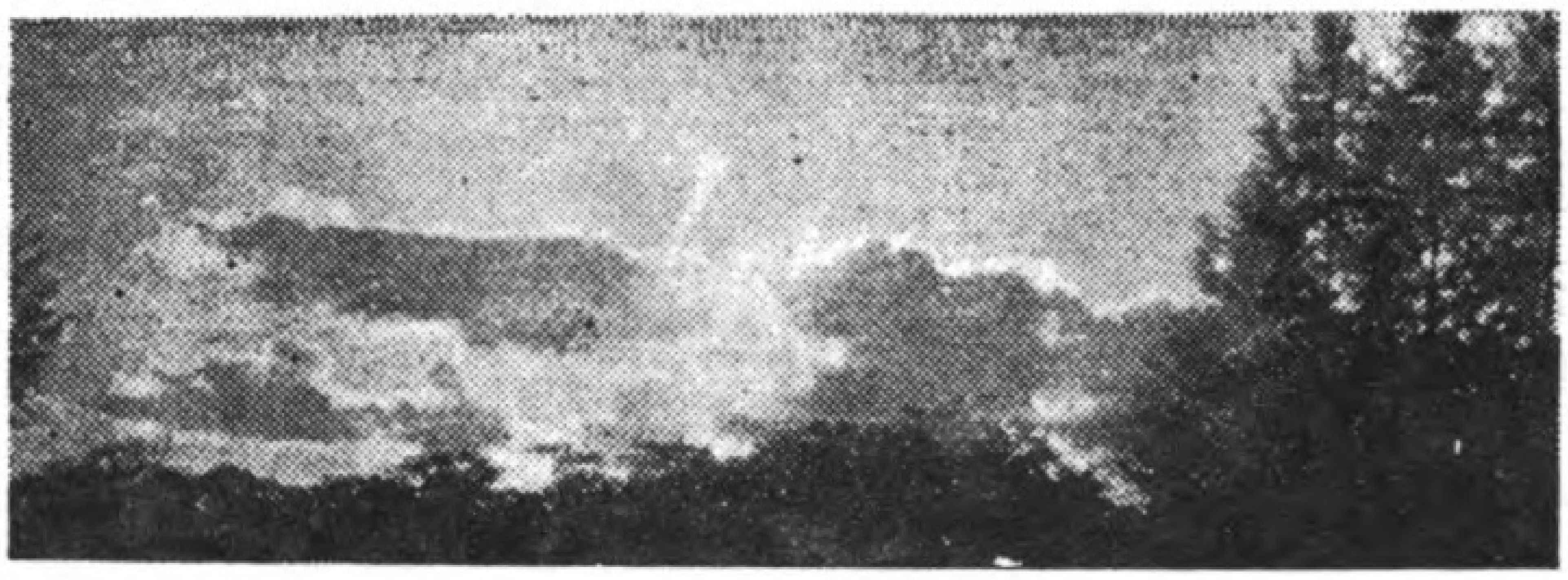
職業婦人社發行

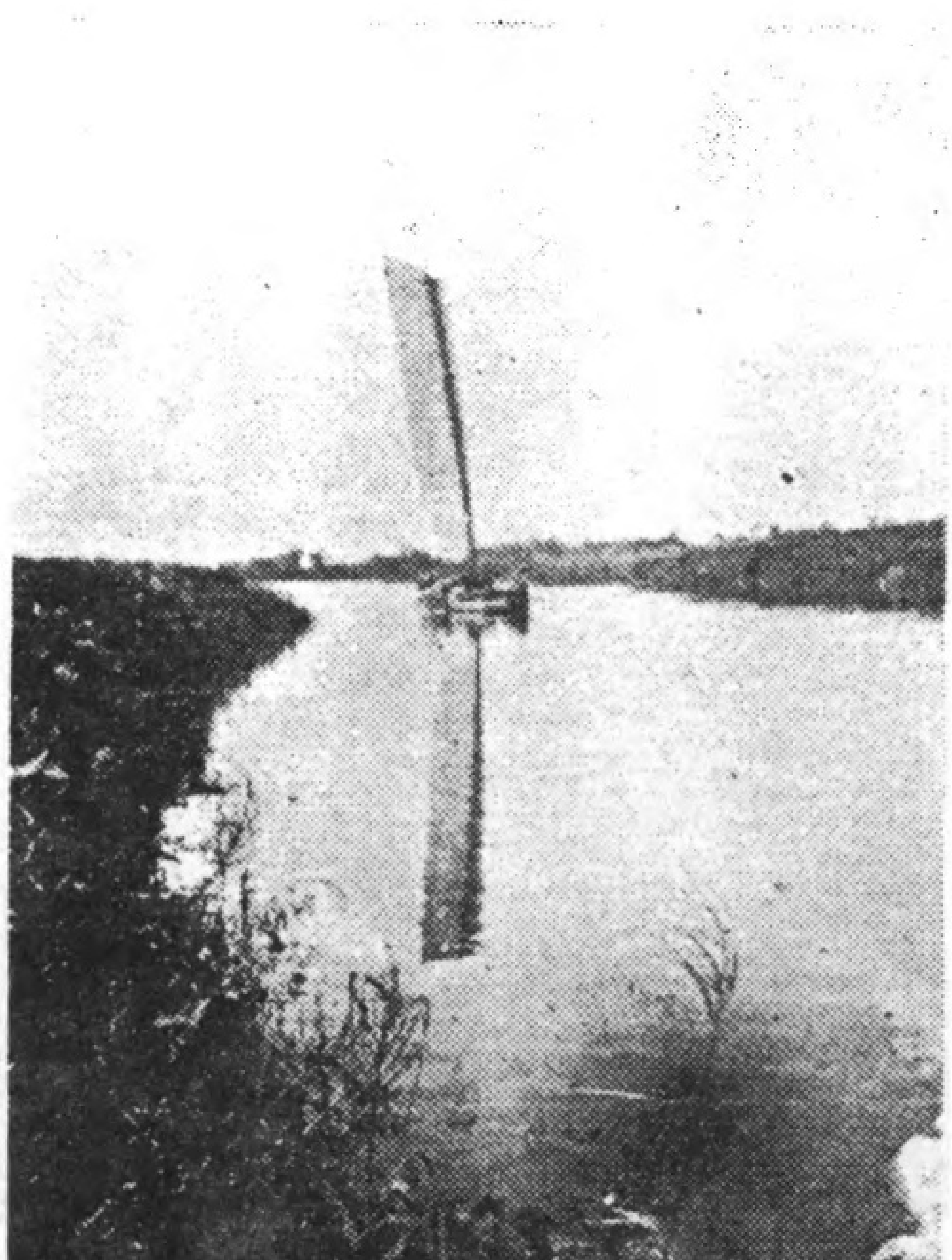
大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可 毎月一回一日發行 昭和三年八月五日印刷納本 同三年八月六日發行 (第六巻第七號)


涼味こゝに湧き
美味これより生る！
天下一品
キッコーマン醤油
日本一
万上
マンジョウ味淋
資本金三千萬圓
製造高五十萬石
野田醤油株式會社









婦人運動 八月號 第六巻第七號 目次

中西伊之助著（最新刊）

創作 熱風

暴動か非協同運動か
虐げられた印度民族の叫びを聽け

マハトマガンデイ！　彼はレニンよりも深刻、ムツソリニよりも崇高である！　彼は全三億の同胞のため、暴虐イギリス帝國に叛逆して遂にその一命を犧牲にした。今や彼の炬火の如き魂は全印度に漲り、晝は雲の峰となり夜は火の柱となる。彼の若き一使徒は巨万の財を捨て孔雀の如き戀人を捨てて街に田園に非協同運動のために戰ひ、遂に暴虐なるイギリス官憲の銃劍の下に殪る。吁、ガンデイズムは遂に全印度民族を救ふに足らざるか？綺羅と寶石を擲つて戰ふ乙女、長槍を執つて起つ農夫、野に森に砲火轟き、絞首臺に流血迸る。しかもその半面、千尺の地下室に於て情痴に狂ふ野獸の如き人々の群、凄慘にして雄大、深刻にして神嚴、實に本書に依つて作者の烈々たる民族解放の胸焔に讀者は頬を灼かれむ。綠蔭の下に本書をひもとけば、熱風薫る新しき印度は彷彿として眼前に迫らむ。

四六判八〇二頁
定價二圓三〇錢
送料（書留）二七錢

東京麹町下六番町
平凡社
振替東京二九六三九

婦人運動

八月號



戀愛の清算

封建時代、わが國でいへば德川幕府時代は完全に婦人が征服された時代である。あの時代の婦人は、家督をうけ繼ぐための子を生む器械であり、一方では、男性を樂しませる性的玩具であつた。婦人の貞操は、そのためにある特種の婦人を除いてきわめて嚴重に守られて來た。無論それは、婦人の自發的な意志ではなく、支配者であるところの男性が强いてさうさせてゐたのであることは云ふまでもない。婦人はその强要された道德のもとに自分のほんとうの意志に逆つても、命にかへて貞操を守らなければならなかつた。

時代は明治となり、大正、昭和となつた。さうして社會の外的生活はめまぐるしいほど變つた。この恐しい變化の中で、婦人だけに强要されて來た貞操觀、即ち性道德はちよん髷時代のまゝで、そのまゝに取殘されて來たのだ。

資本主義文明の當然の結果として、婦人も街頭に驅り出された。いろ／＼な職業を持つやうになつた。男子並みの教育を受けるやうになつた。さうして、完全な男性支配にひびが入りだしたのだ。その結果、お先つ走りの女が、性的に自由に振舞つてゐる男の眞似をやりだした。自分の意志に逆つた結婚に對しては責任を持たなくなつた。

三角關係、四角關係の悲劇がそこゝに生れた。モダン・ボーイに對してモダン・ガールが生れた。マルクス・ボーイに對して、マルクス・ガールが生れた。さうして婦人の貞操問題が社會のやかましい問題になつて來た。

これは無論好ましからぬ現象ではあるが、社會が男性の無責任な性的生活を肯定してゐる限り、一面極めて當然の現れであると云はなければならない。

有史以來の男と女の間に於ける支配者被支配者の隷屬生活は、兩性の性的特徴を極度にゆがませた。男性の所有慾、女性の被所有慾、この不自然な接觸は、過剰な戀愛と、病的な性的刺戟とを一大不幸な遺產として我々の手に遺した。

毎日新聞の三面を賑す悲劇よ、經濟關係と、男女關係、それは二にして一つだとも云へる。一つの原因が生む二つの悲劇だとも云へる。もういゝ加減に生れ變らなければ駄目だ。男も女もすべての人間が平等の地位に立つて、新しい文化を建設しなければ駄目だ。不公平な富の淸算と共に、過剰な戀愛や、病的な性愛を淸算しなければ駄目だ。

コロンタイ女史の著『戀愛の道』、わけて、その中の『三代の戀』が譯されて、兩性問題に興味を持つた人々に、いろんなショックを與へてゐるらしい。『三代の戀』はよし極端な一例であるとしても、舊い道德が權威を失つて、新しい道德が建設される迄の過途的時代には、何かの形式で我々が踏み越えなければならぬ姿だ。

たゞ我々は出來るだけ早くこの人生の渦卷を勇敢に渡らねばならぬ、何故なれば、戀愛の淸算は斷じて無選擇な性愛を意味するものではないから。それは純潔な、より高い、より健全な性的結合を見出すための當然の過程であるから。

コロンタイ女史は、その序文で、戀愛は一私事だと云つてゐる。あるひは戀愛は一私事かも知れない。がその結果二人の間に第三者、卽ち子供が生れるとすれば、それは個人的一私事では決してない。それは既に立派な社會的な出來事である。ゾラの有名な大著ルーゴーンマッカール叢書を讀む迄もなく『三代の戀』それ自身が、既に社會的出來事であることを何よりも有辯に語つてゐるではないか。

新聞の報導は、雜誌の記事は、人の噂は、凡て過去の習俗に慣された安價な興味本位である。興味の蔭ふかくかくれて地味に、健實に、靜かに脇目も振らず自個と社會を見詰めてぐん／＼歩いてゐる多くの女性がある。それ等の人々は戀愛を否定しない。むろん結婚を否定しない。たゞ過剰な戀愛に煩され、安價な結婚生活に狎らされる事を恐れるのみである。自由、純潔、友愛、尊敬、同志、それ等のものに裏記された性愛、彼女等たちは時が來れば卒然としてそれに手を差し延べる事を躊躇しないであろう。

猫

富士辰馬

○

——何か涼しいものを書いて下さい——と奥さんとこの涼しさうな少女さんが來て言ふ。涼しいものなら、自分の愚鈍な頭を緊張させずに濟むと思つたから、

——畏まりました——と簡單に引受けた。處でその涼しいものが容易に書けない。

その仔細は何であるか。自分もどうやら新聞屋になり切つて仕舞つたやうだ。職業上の習慣に依つて、自分の頭を占領するものは常にその日の日程に上つて來る問題である。そしてその翌日はその日程に上つてゐる自分を囚へる。過去の甦生や將來への幻想、波の蒼や綠蔭への憧憬、そんなものが私の心から逃げ去つて仕舞つて、一の問題から次の問題へ、そして第三の問題へ自分の頭と心臟が競爭で移つて行く。これが涼しいものの書けない、一つの仔細。他の仔細は私の貧乏なことになる。私には日曜もない。日曜は日曜で失業中の友達や自分の暮しを改善するための仕事をしなければならない。私の心臟はほんとに寢る時間の外休息を知らない。前世紀の八十年代に於けるロシアの若いインテリゲンチャは當時の酷い反動と吹き荒む專制の暴風雨(あらし)に對する個々の抵抗が抵抗者の滅亡に終つた時、深い絶望の淵に投げやられた。八十年代人と言へば、憂鬱に兩手をぶら下げた、凡庸な生存の泥沼に沈湎した絶望者であ

る。この氣持を最も鮮かに表現した戯曲家のアントン・チエホフはこんな警句を吐いてゐる。

——途中で葬式に會つて『お前は墓場へ行け、俺は夜會に行くのだ』——

日曜にも安息を持てない私は、この警句を聯想して、ブルジョア氣のある友達が避暑に行くのを見ると、お前は避暑に行くのか、俺は無休仕事に行くのだ、と肚ン中で呟く。

○

こんな氣持から、どうして、涼しいものが書けやうか。今の私は、扇風機でなく、殆んど猫である。猫は涼風の製造器ではない。

だが今や猫は、鐵を熱する炭火を吹き起す代りに、お約束に依つて扇風機の代用を勤めなければならない。

よし來た。そこで猫のことを書かう。

私は猫が何處の國で何時の時代に人類と同棲することになつたかを知らない。一切の自然を自分の爲に利用しないでは置かない人類が、地理上や氣候上の差別に頓着なく、人類の家屋に棲んで、人類の食物を喰荒す鼠を喰ふ猫の本能を全く經濟上に利用したのが始まりであるか。それとも、金持の妾がするやうに、その馴々しさと從順さと可愛い姿態をどつかの原始人が愛翫し始めたのか、そんなことを調べる暇がない。そんな起原を詮索すると自分には莫迦に面白いであらうが、讀む方には暑くなるから此處には止めるとして、さて、私のところには素晴らしい猫がゐる。數年前に田舍に歸つた時、白色の勝つた牡丹毛の三毛猫が栗林の芝生に親子でふざけてゐた。脊なかに溝が通つて丸々と肥つてゐた。

○

眞夏のカッ日と栗の蒼い蔭と山百合の香を含んだ冷たい風と生き盛つた芝生から、蒸れ上るほてつた風を脊景として丸つこい猫がふざけてゐる。その光景が私の血管に生氣を流し込んだ。

私はそこでその仔猫を汽車で送つて貰ふ約束をして歸つた。

その猫は私のとこで三年かを過ごした。その間に幾度もお産をした。何時も二つか三つか宛。所が、今年の晩春、この牝猫から異常な例外が飛出した。異常な例外とは、三毛の牝猫と一緒に三毛の牡猫が飛出したのである。

私は三毛の牡が滅多にないことを聞かされてゐた。自分も見たことがなかつた。そして三毛の牡が高く値ひするといふことを聞いてゐた。何故に高いか。第一に最も稀に存在することゝ、第二に天候を豫感して漁師を危險から救ふこと、と云ふのが牡三毛の價格を構成する主要な要素であつた。私の知識に於て。

私は生れた許りの仔猫を順番に産褥から、親猫の懷ろから取出して、精細にその性器官を點檢し、三匹のそれを比較して、その一つが正確に牡であり、他の一つが牝であることを知つた時、

――やいッ！　しめたッ！　と叫んだ。――やい、牡だぞ。三毛の牡だぞ――とお婦を呼ひ上げた。お婦は飛んで來た。

牡の徴候は正に捕捉された。次には三毛の徴候である。白が大部分を占めてゐる。尾と背なかと額に掛けて黒が島嶼を點綴してゐる。最後に大切の赭色である。あるある。耳のつけねと、それから、脇腹と尾の裏側とが赭色で刷はかれてゐる。

正直に白狀すると、私は盜棒に取られるな、これは價値だ、といふ經濟上の概念が、最も原始な形態に於ける經濟

上の概念が私の頭を閃き過ぎつた。

——だいじにしろ——私はお嬶に言つた。慾の深いお嬶は經濟上の微笑を頬ッぺたに小波立たせた。

私は田舍の知人や親戚に手紙を書いて猫の買手を探してくれろと言つてやつた。田舍からは大切にしろといふ返事が來たが、買手の推薦状は來なかつた。

○

所がある晩にカタストローフアが起つた。生命の危險に曝された獸の鳴聲が私を眼醒ました。深夜のことであつたが私の意識は瞬間にその完全な機能を回復した。何といふ光景だ。私の足もとで恐しい暴虐が演ぜられてゐるのだ。椽側から障子を通して洩れる二燭光の電燈に照らされつゝ、數匹の猫が悲痛な叫びを揚げて鬪爭の眞ッ最中である。私の眼は薄暗い光の下に素速く猫の數を慥かめた。一つはでかい餘所の猫、一つはうちの親猫、一つは仔猫。

その仔猫が餘所の猫に嚙み殺されたのだ。

——畜生！

私は仔猫が、でつかい猫の得體の知れないルンペン猫の頭にはさまつてぶるるッと微かに顫えたのを見た。私の復讐心は一時に燃え上つた。私の右手は何か固いものを探した。固いものが見つからなかつた。辛つとでインク瓶が見つかつた。

——畜生！ ——私はそれを投げつけた。

キヨロ〱したルンペン猫が逃げ去つた後には、咽喉を喰ひ切られた仔猫が死んでゐた。親猫が悲しい聲を出してうろついてゐた。

ボグロームに會つた仔猫が牝の方であつたことを知つた時、そして牡の方は、二三寸か開いてゐた襖の奥際におど〳〵しながらちゞこまつてゐるのを見つけた時、私は好かつたと思つた。可哀さうさは縦令同じであつたとは言へ、そして私は直ぐに外へ出てこの犧牲を地中に埋めた。

○

それから一ツ切りになつた仔猫はぐん〳〵と成長した。尻尾を小廻しに動かしながら、獲物を狙ふ眞似をするやうになつた。その間に牡猫の價値に就ていろんな話を聞いた。一人の青年が言つた。もとは船が暴風雨に會つて、方角を失ふと、牡の三毛猫を縄で結へて海に投げる、牡の三毛猫には陸地に對する感覺が鋭いので、最も近い陸地に向つて泳ぎ出す。船員はこの方向によつて陸地を知るのだ。だが今では羅針盤と海圖があるから、三毛猫の要は無くなつたと。

成る程ね、と私は思つた。十八世紀の末に紡績機や織機の發明が多くの失業者を喚び起したやうに、バスが俥屋さんの職業を奪ふやうに、羅針盤は牡の三毛猫から經濟上の位置を奪つたのだね、と私は考へた。

なあーんだ、それぢや、この三毛猫も駄目かと私はその青年に言つた。

それから或る物識りが説明した。牡の三毛猫には Sperm がない。大學の醫科や何かでその原因を研究してゐるが滅多に牡を得られないので、未だにその原因が解らないと。

そんなこんなで、想像される價格に基因する猫への愛著は私から脱け去つた。仔猫の成長と共に、その毛並が揃ふと共に、親子の猫は私の生活圏に深く侵入した。

――子供がこんなに多いのに猫の世話は澤山だ、猫のせゐで一枚も満足な襖はない――と繰返すお婢の愚痴に反行

して、この猫達は私の缺くべからざる親友となつた。

數年前にモスクワへ行つた時、私はシベリヤの汽車で大きな虎猫を見た。食堂車の中である。外は吹雪。食堂車の中は暖かい。食堂の給仕――と言つても、若い少年ではない。レーニンのやうに頭の禿げ上つた、極く小作りな爺さんである。無口で愛嬌のある爺さんである。その虎猫はこの爺さんの友達であるらしかつた。大きな虎猫――恐らく、私の見た猫の內で最もでかいものであらう――は食器を運ぶ爺さんの後に跟いて、絨氈の途をのそ〱と往徠してゐた。乘客は、その猫を見ながら、甘い晩餐を喰つてゐた。恐らくシベリヤの曠野を走りながら、自分の家で飯を喰ふやうな氣がしたであらう。爺さんの友達、爺さんの道伴れ。何故か私にはこの猫に就て深い印象が殘つてゐる。

(二十一頁より續く)

チメンタル――何かかう社會のために盡すといふことがいかに偉いことであるかといつたやうな、うはずつた、個我的功名心から社會運動にたづさはるとか、事大主義的な小兒病的な――ある一の有力な團體に屬することを誇とするやうな巧利的な奴隷心からか、この三つのうちのいづれかである場合が多く、すべて反動者やインテリゲンチャの間に生ずる鞘間的特殊的心理的狀態で、新興の生活者のもつ自然そのものゝ怒り、反抗、正義などを意味せず、悉く利己的、巧利的な動機に基くものである

◇

私は並木さんと共に、戀に對する『眞摯な態度』を希望するものであります。それは即ちさうであることが、社會的關心においても『眞摯』であり『至純』であることを了解してゐるからであります。かく、戀及び社會に對する私どもの心理狀態は、極めて有機的な關係を有するものでありまして、一方において至純な人は、他方においても必ず至純であり、一方において巧利的であるならば、他方においても必ず巧利的であることが、人生通有の否定しがたい方則であることをこの際大いに考へて見る必要があらうと思ふ次第です。と申しても、私は何も一切の玩弄的な、利己的な、遊戯的な戀愛を否定しはしない。さういふものに大いに同情する場合もある。然し、それを新興者の戀愛觀とすることは出來ない。すべての新興思想はあらゆる意味、極めて微細な點においてまでも建設的であるべき筈であるからである。

(お盆の十六日、地獄の釜のふたのあく日)

涼風に語る

奥栄一

竹馬

夏の夕方と云ふものは何となく人間の心を子供つぽくするものだ。

陽が暮れたあとの、あのへんに白つぽい、澄明な明り、その明りの中で、くつきりと、浮んで見える物の象。眼に見へぬ一抹の涼風に、息付いてゐる草、木、人、犬、馬、そこには原始的な親しみ深い何物かを私に感じさせる。

さうした夕方の事である。

私は子供達と一緒になつて竹馬に乘つて遊んでゐた。

と、出先から歸つて來た妻が、私の姿を見付けて、

「まるで、良寛見たやうだな」

と云つて笑ひ出した。

成程さう云はれて見ると、洗ひ晒した、ぼろ〳〵の單衣に、頭の毛はばう〳〵と生え茂つて、苔の生えたやうな不精髯の延びた痩せこけた四十男が、子供と一緒に竹馬に乘つてゐるのであるから、良寛と云つて呉れたのは余つぽど女房のヒイキ目に違ひない。

私は笑ひながら竹馬を下りて、家の中へ入つて、寢轉んでしまつた。

何となく寂しい氣持だ。

無論女房の云つた言葉に一點の皮肉などはありはしないのだが、私は頭の中では、今まで氣附かなかつた成心、

良寛といふ偉い坊さんを引合ひに出して、私自身の愚かな戯れを、意味づけ様としてゐるのではないか、私のけちな心は、そんな事を氣にしてゐるのであつた。

私は可なり永い間寝込んでいたらしい。氣が附いて見ると、薄暗の中で、私は誰にも聞えないやうな小聲で、

「俺が死んだとて、誰が泣いてくれよか、さ、山の烏と親ばかり……」

と繰返し／＼、二十年も前によく唱つて歌を唱つてゐた。泣いてくれる親なんかは遠の昔に死んでしまつて有りもしないのに。

犬

小供が欲しがるので小犬を一匹貰つて來た。

丁度その時分、狂犬豫防の週間とかで、鑑札を受ける金もない私達は、三坪に足らぬ小さな庭へ、小犬を繋いで置く事にした。

ちつほけな庭に繋りつけられて、小犬はもどかしがつて、毎日庭の中を荒れ廻つた。

「ねえ、御父ちやん、早く鑑札を貰つて來ようよう」

上の子供はかう云つて私にせがむ。

「放しちやいや、お巡りさんに、捕へられるから、いやよう」

下の女の子は、面倒臭くなつて、放してやらうとすると、そう云つて泣き出す。

「犬なんて、プロレタリアの飼うものぢやありませんねえ」

此頃そんな言葉を覺えた、宅に居る若い娘は毎日小犬にせきたてられて如何にも閑人らしく用便に連れ出す私の後から、こんな皮肉を云ふ。

が何よりも困るのは、何時の間にか座敷へ泥足で上つて來る事だ。

「ねえ、御前は下に居るものだよ、人間の居る處へ上つちやいけないんだよ」

私は無慈悲に突き落とした後で、犬を相手にこんな説法を鹿爪らしくする。でないと、

「御父ちやん、可愛想だから上にあげてやらうよ」

と云ひ出す子供達の提議に、賛成したくなりさうだから。さうして内心では、

『御父ちやん、何故、犬は下に居なけりやならないの』

と子供が云ひ出さねばいゝが、と心配するのである。

小犬は此頃では、もうすつかり私共親子に慣れ切つてしまつた。あの茶つぽい異人見たやうな眼で、私の顔を見ながら『御父ちやん』と云ひ出さないのが不思議だ、いや、五つになる女の子は、平氣で自分の事を犬に對して姉ちやんと呼び、上の子の事を犬に兄ちやんと呼んでゐる。

ジヤズ「マルクス」

『ねえ、私達が此處で、こうしてお酒を飲んでゐると云ふ事はマルクスの辨證法的解釋に依れば……でせう』

私は隣の卓の見知らぬ學生から不意に、こう呼びかけられて、吃驚して眼を見張つた。

が次の瞬間にその學生が又くるりと向ふ向いて女給の聲に合はし乍ら、タランタランタン……とジヤヅの調子をとりだしたので二度吃驚した。

『マルクスもジヤズになるやうぢやもうお終ひだね』

外へ出ると、私の老友はこう云つて話しかけた。

『いや、御終ひになるのはマルクスぢやなく智識階級て奴なんだよ』

私が噛んで吐き出すやうに答へた。

雨模樣のむつとする、暗い夜である。

『七百年も前に法然と云ふ坊主が巧い事を云つてゐるよ「一文不知の愚鈍の身にして、智者の振舞をせず、只一向に念佛すべし」つてね。お互ひに念佛でもするさ、でなきや……』

『タラン、タラン、ララ、マルクス、エンゲルスか』

『ふん、も一つ、でなきやだ』

二人はそれきり、默つてしまつた。

波の音

ごつさあ……どつさあ……

重苦しい、リヅミカルな遠い波の音が聞える。

私は眞暗い暗闇の中に寢てゐるらしい。ぴつたりと直ぐ傍に睡つてゐる母親により沿ふやうにして、無論何處を見ても眞暗で、母親の顏も姿も見えるわけはないが、私はその甘い滲み込むやうな感觸で、自分が母親の側に居る事を明瞭と知つてゐた。

どつさあ……どつさあ……

波の音は何時迄も續いてゐた。

私は愕びえてゐるのか甘えてゐるのか、恐らくその兩方が一緒になつたやうな感情で、今にも泣き出しさうになつた。

と、其突端に私は眼が醒めた。

私は何年ぶりかで故郷の波の音を夢に見たのである。

初夏よ別れて還し紀伊の國住む父もなし住む母
もなし

初夏よふと眼に浮ぶたらちねの名のみに殘る紀
伊の山々

住む父もない、住む母もない故郷、住み慣れた家さへも跡方もなくなつた故郷、私はその故郷の波の音を、思ひもかけぬ眞夜中時に、夢の中で聞いたのであつた。

奇怪な贈物

何年振りかで、私は他所の宅で、クロポトキンの『麵麭の略收』を取上げて見た。

十數年以前の事である。私は東京の學校を途中で止めて、田舍の家の後に堀立小屋を作つて、その中で、繩を綯ふてその日の暮しをたてゝゐた。

丁度その時分、私の町にゐたOといふ牧師が他國へ引越す事になつて、私への紀念として、一挺の廢銃と『パンの略取』を友人を介して屆けてくれた。

親鸞からトルストイへ、トルストイから唯物史觀へ、唯物史觀からクロポトキンへ、私の內的生活が周章しかつたやうに、私の外的生活も周章しかつた。その後の十數年窮乏と、困苦に打ひしがれた生活の途上で、私は何時となくこの意味深い贈物を失つてしまつた。今私は、『麵麭の略取』を手に持つた瞬間に、私は今一つの手に一挺の廢銃の重味をあり〳〵と感じたのであつた。

新しき戀愛と舊い詩

高群逸枝

◇

新しい戀愛とか、遊戯的戀愛などゝ、近頃ずいぶん唱へられてゐるやうですが、かういふ風潮は、私などの二十歳頃から、ずつと始まつてきたものゝやうに思はれます。

◇

二十歳頃の私——その頃の私は苦悶とか、反省とか、精進などいふ言葉を、あたまから嘲り笑つてゐました。苦悶といふものは肉體的な現象をほかにしてない。精神的な苦悶？ ふん！ と私は笑ふのでした。後悔とは何か？ そんな氣の長い、じめじめしたことが、われらに何の關係がある。後悔とは何ぞや。拋棄のみ！ と私は叫びました。

『一切を
ほんほんほんほんと投げ飛ばし
さてそのあとに
なんにも殘るものはない
くろ髪は肩に垂れ
月光は身を照らす
戀人よ、うらみ給ふな
またの世界で會ひませう！』

と私は歌ひました。

『戀を願ふか
自由を願ふか
自由そのもの〻戀しかないのに
戀そのもの〻自由しかないのに

戀か？　自由か？
二つとも！
月日が足元を過ぎようと
大海の水が一度に溢ふれて來ようとも
歡樂は
一瞥の中

日光を一瞥せよ
そして歩いて行け
そして云ふがい〻
もしもしあたいの
上品な戀人さまと
くろい髮の毛を掻りくづせ
そして地平線まで歩いて行かうと
長い袂をちぎつて投げようと
みんなお前の勝手だよ』

とも申しました。

　私の二十歳の頃は、もはや前の世紀の二十歳的少女のやうなセンチメンタルなものではなかつた。そこには夢を失つた世紀と、新たな科學的な世紀との兩者がひとしく件ふてゐる、いはゆる個人生活における遊戲乃至享樂哲學があつた。

◇

『跳ねてお呉れよ娘さん
お日樣くるくる廻つてる
お日樣袂へ落つこちる
どこが山やら世界やら

跳ねてお呉れよ娘さん
ひらりと上れば天の川

ひらりと下れば薔薇の床
　忍んでおいでなツォイスさん」
と私は唄ふのでした。けれど私には享樂の意味がわからなかつた。私達が享樂生活を欲し望む時に、まづ第一に私達にくるものは感覺的なそれだらう。けれどそれは極めて粗雜なものでしかなかつた。私共はそれを享樂の對象とすべく、あまりに複雜であるらしい。美とは何か？　自由とは何かく　みんな馬鹿げたマンネリズムだ。

二十歳の頃の私共の生活、少くとも戀愛に對する私共の生活は、かういふ狀態であつた。いまの夫などもその昔に全くさういふ風な青年の一人でした。

彼の歌、

「わが戀は落書としか思はないが、あはれ不覺の淚點々」

◇

全く徹苦笑ものですね。それで御當人達は、可なりいゝ氣なものでありました。我々の生活とすべく、戀愛などは、まことに塵にもひとしいものと私共は思つてゐました。そして我々の全的生活の探究といふことが私共にとつては最高の關心事でした。その頃はまだ社會思想も普及してゐませず、それらのことに就ては、何ひとつ知識がなかつたが、それでもラッセルの社會改造論とか、平民社版の今は表題をおぼへてゐませんが、たしか幸德秋水のものなどを讀んでゐました。

◇

ツルゲエネフの『處女地』の女主人公なども「戀愛などより同志愛を……」といつたやうな樣子ですね。かういふ狀態は特にインテリゲンチヤ——妙に一方に偏したがり、そしてまたそれを强調したがる——の間に見られるやうに思ひます。然し、さういふ態度は、側から見ると、まことにキザであり、うはづつてゐる。

◇

七月號の並木翠子さんの戀愛觀は中々しつかりしたものでありました。ことにコロンタイの『三代の戀』の女主人公が『私は遊戲的な戀をするが、それは戀をするのに十分の暇を持つてゐないからだ』といつてゐるのに對

して『凡ゆる時間を吾々から奪はれる革命の時代？……吾々は考へよう。さうした忙しい革命の中にあつて果してまじめな戀ができないものであるかを』また『吾々がそれに直面した時、いかに眞摯な態度を必要とすべきかを私は思ふ』といつてゐられるのに對しては全く同感であります。

◇

戀と暇とを結びつけるやうな考へ方は有閑者乃至インテリゲンチヤのもので、戀の性質に對する見方はもつとずつと違つたものにならねばならない。

戀愛至上などゝ、へんに嘲り去る風潮があるけれど、純粋な戀愛は小說や詩などで見ても『戀愛溺沒』ではない。どころか、さういふ戀愛の持主は、その當時の社會における最も純粋な、男なら男らしい、女なら女らしい理想の人物で、大いに有爲な社會人であるのを常としてゐる。一方に純粋でありうるものは、他方においても必ず純粋でありうる。かういふ人々は、自然の性情を活かすものであるが故に、決して一方に溺沒するやうなことはない。何となればあらゆるものを併せ活かすのが自然の意志であるからだ。

これに反して、戀愛遊戯、戀愛玩弄の徒輩こそ、一つのものに不自然な不純な意味において溺沒する傾きがある。かの遊蕩人を見よ。彼等は戀愛、否、色情に全く沒頭して、自然の與へてゐる他の性情、社會的關心などについては殆んど無感覺である。

いつたい戀愛玩弄の意識は、戀愛の自然ではあり得ない。それは人間の利己主義、功利主義に根ざしてゐるものであるから、これが社會に對して働く場合も同じである。

私生活においては戀愛玩弄の意識をそのまゝにしておいて、一方社會的に仰々しく大言壯語したり、或は色々な陰謀をめぐらしたりしてゐる人々は、口には社會正義を唱へてゐても、その動機においては、かの戀愛遊蕩者と同じやうに、個人的な利已主義、巧利主義に根ざしてゐるものであることを常としてゐる。例へば官僚的名譽慾、或は權勢慾のために社會に關心するとか、或はセン

（一三頁へ續く）

身のちゞまる話

堺 眞柄

今日は、土曜丑だといふので、Tさんが、わざ〳〵遠くまで釣りに行つて、やつとの獲物である、大鰻、小鰻を貰ひました。これでも、串にさゝつたのには、時々お目にかゝつているのですけれど、頬ぺたをふくらませてノタ〳〵泳いでゐる長い生きものゝ始末には當惑してしまひました。そこでお隣りの物知り奥さんのお手を煩す段、たのみ込みました物知り奥さんは、ぬる〳〵鰻に逃げられて、爺さんと婆さんが、町内中、追つかけまはしたといふ落話(はなし)を、地でいつては大變だとばかりに、大盥に水をいれ、その中に俎をおくといふ大仕掛けな道具立てをして取りかゝつて呉れました。

錐で頭を突つさゝれた俎上の鰻は、存外に諦めがよく、そんじよそこらの未練坊主には程よい見せしめになるものでした。物知り奥さんは、庖丁の持ち方、その他よろしくの構へがあつて、背をさいて骨を抜きとつたのでした。その時鰻は、チヂーヂど、自分の身をちゞませました。いかにも苦痛に對する最後の防禦の様に！

氣のつまる様子、その縮みかたに、私は、思はず溜息をつきました。それと同時に、何年か前の鰻にからまる皮肉なことを思ひ浮べました。

何年か前の或る夕方、私共夫婦は、ブラリと外へ出たのでした。その頃は、郊外に住んでいたので、人里戀しく、賑やかな方へと足を向けました。それにその前晩、電氣の球をこはしたので、それも實はなくちやならないのですから、ブラリと出たとはいへ、目的もあつたのです。新宿の通りまで來ると、もう夜店が出かゝつているので、ひやかしながら歩いてみ様といふ事になつてしまひました。大いして感心する様なものはないのに、いち〳〵のぞき込んでゆく所に、夜店の面白味がある様です。で、まあ、そんなこんなで、ブラ〳〵歩いてゆきました、古道具が出ていました。私共は夫婦揃つて道具好きなので、安すくて、飛び切り氣に入るものはないかなアと、大いに掘出し心をおどらせて見まはしました。と、スミツこに『よりどり十錢』として、ボール箱に、電球が、十程いれてあるではありませんか。電球が道具やで賣られるのも笑しい話ですけど、安い所が、氣に入つて『これ切れてるんぢやないんでせうね』ときいてみました。道具やさん、フンゼンとして曰く『いくら古道具だつて、役にたゝないものは仕様がありません。これは盗電をしている家から、取り上げになつた球を、會社から下げて貰らつて來るんで、仲間ぢや、アゲ球つてんです』といふわけなのです。そこで私

共は、それを買ひました。二つで二十錢なのです。一圓程の積りなのが、二十錢で、すんだのですから、嬉しくてたまらず、その儲け(？)で、御飯を食べる事に、一決して、通りかゝつた、鰻やに入つたのです。鰻の話はこれからです。

アゲ球で、大層、大儲けをした氣になつて、夢中になつていたのですが、入つた所の鰻屋は、電氣の薄暗い、しめつぽい、殺風景な店でした。味も、値段に比例しているのでせうけど、餘り芳しくない、私共をして、アゲ鰻なんていふのが、あるといゝと思はせる程でした。けれども豫定にない、言はば、アブク御飯なんですから、とにかく御腹のふくれたのを、取柄として表へ出ました、そして、もうこんな家なんか來まいと思つて、看板をみて驚きました『鰻料理、無我忠』！おまけに、入口には『身をさきて、諸人につくす鰻こそ、げに無我愛の鏡なりけり』と大書してあるのでした。これは、無我愛の伊藤證信氏經營の鰻やなのです。

無我愛の見本に殺される鰻も氣の毒なわけですが、その埋め合せに鰻を無我愛の鏡に持ち上げたのも、コツケイではありませんか。例へ鰻が、自發的に無我愛に投じたにしろ、その義に感じて、鰻無料喰ひ放題といふ事にしたら、無我の鏡といふ譽れを、自分が、うけられるではありませんか、無我愛の主唱者が、鰻の無我愛で、大儲けをしているなど、無我愛のコケンに、さしさはるではありませんか。

私共は、拂つたお金も、おしかつたけど、呑みこんだ、鰻が、氣持ち惡るくて困りました。

鰻には、こうした思ひ出でが、あるので、今、物知り奥さんの手で、さかれた鰻の身がちじんだ時『無我愛？ フフフン』と鰻が自嘲した様な氣がしました。

○

二十六頁の漫畫にもなつてゐることですが――

婦人消費組合協會で講習を初めやうといふことになつて講師の分擔をきめにかゝつたとき、洋服裁縫の標準法がまちまちであるのに一驚をキツしたことでした。

甲『私は、メートル法でやつてゐます』
乙『私はインチで習ひました』
丙『あら、私は物尺でしてゐますわ』
丁『私は曲尺よ』

こんなあんばいで、みんなで大笑ひをしたのでしたが、まつたく笑ひごとではありませんね。

過渡期の混亂時代！

かういふ風に、統制のないムチヤクチヤな今の社會のために、どれだけ私たちが無駄をしてゐるかわかりません。

車やさんは何里、汽車は何哩、針金は曲尺呉服物は鯨尺、洋服地はヤール、マラソンは幾メートル！



漫文　入交總一郎
漫畫　清水やすを

うすもの國難

夏が來た、山に來た、野に來た、海にも來た。勿論、都會にも來たのである。

　夏が來ると、サーベルのをぢさん達が、婦人のうすものに目を光らす。而してそれは、年中行事になつてゐる。

　だが、暑いといふことは決して寒いことでないので、しぜん、著物が薄くなるのは當然な成行だ。そこで、うすものがないから、いつそう裸体で歩け。とは風紀上言へないゆえ、たうたう今年はサーベルを投げ出したとやら。泣く子にや地頭も勝てないてネ。

　大體、うすものが慾情をそそるからいけないとは、そもそも婦人を侮辱した言ひ草だ。

　男ばかりの世界ぢやあるまいし、夏には夏の風俗で歩くのに、なぜ悪いだらう。それは頼みもしない劣情を起す者が惡いのだ。

　悩め、悩め、うすものの季節だ！　而も、モ●ガのスカーツの短かさよ。

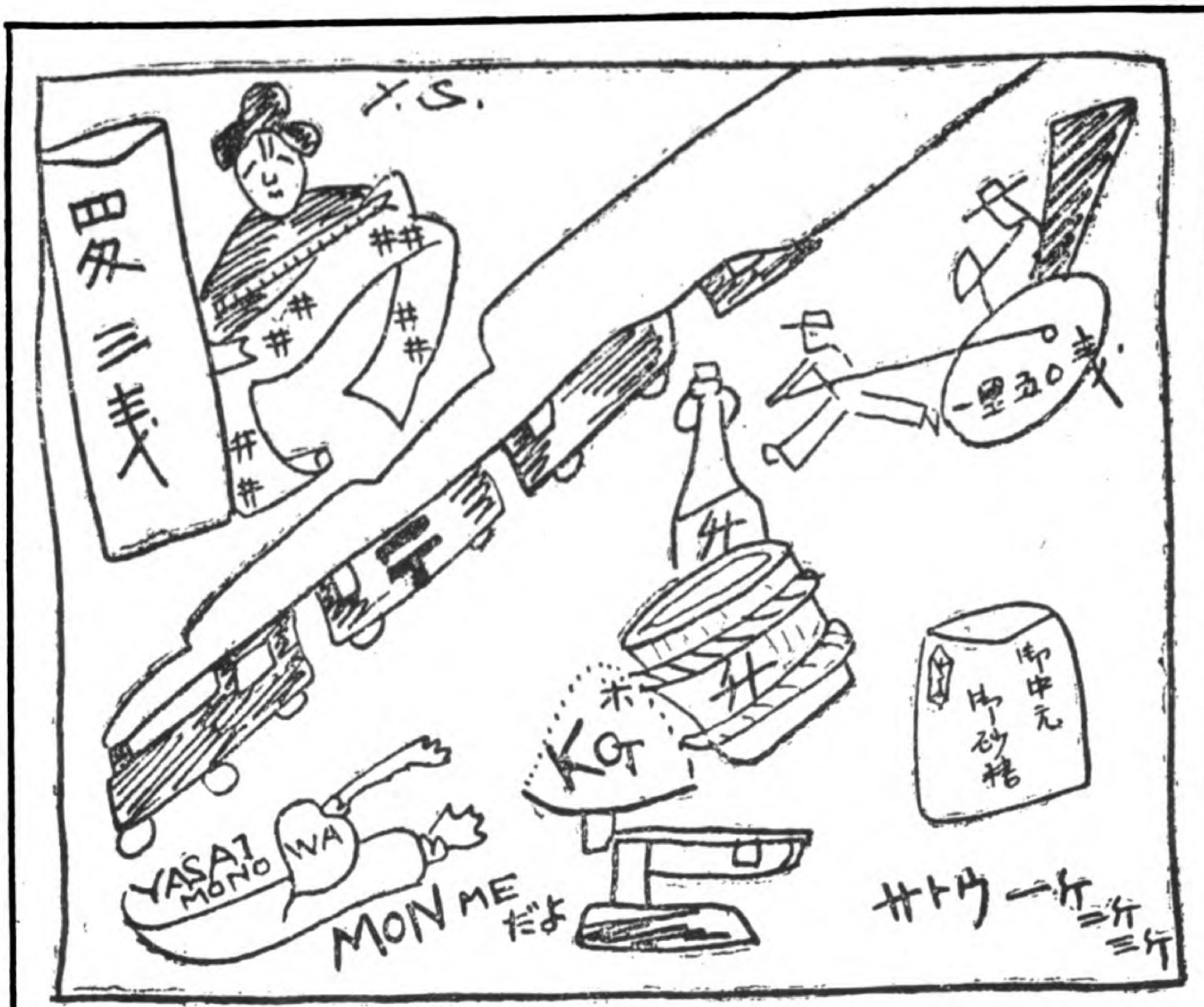


家庭經濟の國難

政府が盛んに經濟國難を叫ぶ折柄、これはまた何と皮肉な調査であらう。これがほんたうの、親の心子知らずなやり方だ。經濟國難即ち家庭經濟國難とチヤカしてみても、淚ぐましいシヤレだ。この負擔は、やつぱり主婦の双肩にあるからだ。

房州産二十個入　靜岡産大一個
A　一圓三十錢　十八錢　十二錢
批　B　一圓十錢　ネ　十五錢　夏　十二錢
C　一圓　一　十五錢　み　十錢
赤羽橋市九十五錢　ブ　十二錢　か　十錢
杷　カスミ町市九十錢　ル　十二錢　ん　十錢
府設市　八十錢　八錢　十錢

A　廿五錢　十二錢五　卅二錢
白金　B　廿五錢　ひ　十四錢　パ　—
ベ百　D小　十七錢　八　十錢　十三錢
玉一目　E小　十九錢　や　十　七錢　ン　—
パ　F小　十八錢　匁　—　—
粉印　眞砂市十八錢　麥　八錢　粉　十二錢
府設　十七錢　—　—



度量衡國難時代

四月の臨時議會は、經濟國難、思想國難、等々が大いに問題されて、何が仕合せになるやらで、倒れさうだつた政府がどうやらお望みの御大典へまでのびさうだ。國難様々と政府當局が喜んでる足の下で、國民は、國難にキユウ〳〵苛められてゐる。何がさう彼の女を苛めてるか、即ち、度量衡國難ではある。

おマンマは言ふ『あたいはキログラムになつてよ』

お酒やお醤油は『俺は小川鐵相閣下のやうに國粋だよ、一升、二升、三升』と言ふし。

お砂糖は『僕は一斤、二斤だよ』

野菜ものは『一匁、十匁、百匁よ』

『ハイ、四匁、三錢』と郵便は走るし、

『ハイこちらは斤目に、マイル、マイル』と鐵道便や汽車が煙を吐いてゐると思ふと『一里五十錢、ハハイツ』人力車は馳るし、着物はクヂラ尺で計り、洋服はメートルで寸法をとります。だ。何と、千手観音もびつくり仰天するである事よ。



罐詰られた婦人解放

男子立入禁止と罐詰主義を叫んで創刊された「女人藝術」の七月號に、山川菊榮さんが「フエミニズム（女性文化）の檢討」を論じ、神近市子さんが「婦人と無産政黨」を叫び望月百合子さんが「婦人解放」の道を說いてゐる。惟ふに、女性解放の意義は、異性と肩を並べて步くところにある筈だ。だのに「女人藝術」の執る道は封建的思想の女人王國だ。そんな罐詰の中から、三女史の論說は、例へば空へ向つて唾を吐くの類がある。婦人解放運動が、かうして罐詰られたり、罐切られたりして、同じ所をさ迷ふのも積極的になれないからだ。女性的な餘りに女性的な優柔不斷であるからだ。

圓太郎の爭議と婦人車掌の活動

湯本與彦

一

現在東京市營の圓太郎乘合自動車に從事してゐる婦人の車掌は約六百名あり、彼女達は市電自治會に組織されてゐる。彼女達は最低日給九十六錢といふやすい賃銀で酷使されつゝある。

市營圓太郎自動車は大震災のすぐあと、市電がまだ充分に復活しない時に、市電の補助機關として初められたのであつたが、其後市電の復活全通と共に利益がないといふ理由で廢止されやうとした。これに對して、自動車の從業員は極力その繼續のために東奔西走し、その結果事業は繼續される事になつたが、その代りに、車掌も運轉手も『自動車事業の基礎が確立するまで』といふ條件の下に待遇の改惡をさへ承認したのであつた。

婦人車掌に、振替公休といふ名の下に與へられてゐた月經時の休暇を廢止されたのも此時である。

爾來幾星霜、市電の行詰りに反して圓太郎は擴張する一方であり、年々巨額の利益をあげて自動車事業が確立するに至つたのは、全くこの自動車全從業員の犧牲的行動のたまもの以外の何ものでもないのである。

然るに今年に至つて當局は、いはゆる七ヶ年計畫で圓太郎の大擴張を計り、而もその計畫資金の半額四百拾萬圓は、更に圓太郎の利益金の中より捻出する事に決定した。

之を聞いてこれまで押へに押へて來た從業員の不平はつひに爆發した。

『事業の基礎が確立するまで』かういふ約束の下に待遇の改惡をまで耐へ忍んで來たのだ。もう自動車事業の基礎は固く〳〵確立した。今度こそ我々の待遇を元々通りに復活させても宜い時だ。

かういふ叫びが、一日六時間働いて月に八十圓以上になるといふ電氣局の宣傳にだまされて入つて見ると、一日十二時



（爭議中の婦人車掌）

間も働いて、然かも月に六十圓位にしかならないので不平滿々でゐた新規採用運轉手の不平と相呼應して、遂に自治會自動車部の名の下に嘆願書を提出することになつたのである。

二

自治會自動車部の名の下に電氣局に提出した嘆願は全部で拾八項目あり、そのいづれもが最低の要求であるが、そのうち婦人車掌の項目は左の四項目である。

一、乘合步合を運轉手と同額にせられたし。

二、附帶作業時間を一時間支給されたし。

三、外套を一年に一着支給しその着用時間の制限を撤廢されたし。

四、月經時休暇を月に三日支給されたし。

一の乘合步合といふのは、乘客の數に應じてその車の車掌運轉手に支給する步合であつて、從來運轉手には、六步を支給してゐたが、直接に乘客を扱ふ車掌には、四步しか支給してゐない。これは甚だ不合理であるから、車掌に對しても運轉手と同樣に六步支給せられたいといふのである。

二の附帶作業時間といふのは、賣上金を勘定する時間の事

であるが、從來二十分しか支給してゐないので電車の車掌の三十分に比較しても尙少い。ところが、仕事は電車の車掌は七錢の均一の切符であるに反して自動車の切符は一區券二區券三區券など、種類も多く、從つて電車の切符よりも計算に長く時間を使ふ事は明かであるから、この時間を一時間にして欲しいといふのである。

三の外套は從來、男子が一年一着宛支給されてゐるにも拘らず、女子だけが二年に一着しか支給されて居らず、惡い布地であるから到底二ヶ年間も使へない。しかも婦人車掌に限つて勤務中に外套を着る事を禁ずるが如きは衛生上からいふも不都合であるし、又男子との比較上からいふも甚だ不合理であるから、外套は一年一着支給し、その着用の制限を撤廢して欲しいといふのである。

四の月經時の休暇を三日間支給せよといふ事は說明するまでもなく、又過去に於て振替公休といふ名の下に支給されてあつた事について考へても、その必要は認められてゐたのであるから、月經時休暇を支給して欲しいといふのである。

以上四項目の要求は、婦人車掌の要求の全部ではない。婦人車掌の要求はまだ〱澤山ある。然し今回はその內から特に痛切な、そして初步的なもののみを擇んでこれを當局に提出したのである。

三

この爭議に際して、婦人は先づ各支部婦人部の連絡委員會を設け、全自動車部員の最前線に立つて勇敢に闘つた。

歎願書は七月二日に當局に提出されたのであるが、その日婦人車掌は百餘名男子を合して百五十餘名が動員されて本局に押しかけた。電氣局の理事者はその豫想外に一驚した。

その日は七月五日に回答する事を約して、全員は櫻田門車庫に引上げて報告大會を開いた。

然るに當局は四日になつて突然自動車部の代表者の所に、『大曲に於ける電車衝突事件の爲に回答日を延期する』と言つて來た。

之に憤激した自動車部員約二百名の婦人を交へ合計約三百名が五日に電氣局に押しかけて、回答延期の理由を詰問した。この日會見中に婦人中よりストライキにうつれといふ言葉はどし〱と叫ばれ、自動車は正に停らんとしたので、當局は

周章狼狽して『九日に誠意を以て回答する』と稱して陳辨これ努めたので、その日はやつと引揚げた。

九日の回答日には婦人約四百名男子約二百名合計六百餘名の從業員は、本局の食堂を占領して回答を聞かんとした。ところが横暴なる警察の干渉によつて解散せしめられ、代表者二十五名が回答を聞くことになつたので、一同は大に憤激し直に濱松町車庫に集つて回答を待つた。

それがために自動者は殆ど停止し、午後四時頃には全市を通じてたつた六臺しか運轉してゐないといふ狀態になつた。

かゝる中に回答が行はれた。

回答の內容は、婦人の要求四項目の內、一、と二、は幾分づゝ增し、三、は容れ、四、は拒絕された。

男子の方の要求は、二項目容れられたのみで、外は全部拒絕された。それはこの爭議の主力が婦人車掌である事を看取した當局の奸策であつた。

この回答を迎へて十二日に自動車部大會が開かれた。その席上で婦人は飽まで鬪ふ事を主張したが、全般的な情勢から見て一時休戰する事が有利と思はれたために、この際一時休戰し、更に機を見て再び火蓋を切る事が決議されたのである。

一人の勇敢なる婦人の指導者は、今なほ警視廳のブタ箱に抛り込まれてゐる。

四

この爭議を通じて團結した婦人の力が如何に强いものであるかゞハツキリと判つた。

この爭議は、婦人があんなに戰鬪的でなかつたなら之だけの成果をさへ見る事が出來なかつたかも知れない。

勇敢なる婦人車掌諸君は、今自治會自動車部の組織をよりよく確立するために奮鬪しつゝある。

いはゆる婦人同盟の指導者諸君が小ブルジョア意識に低迷して居り、その行動が婦人勞働者の切實なる要求を捉へて居ない現在、この爭議こそ全日本の婦人勞働者諸君に、その行くべき道をハツキリと敎へたものと言へる。

鬪爭こそが眞に無產階級を解放する唯一の道であり、男子勞働者と一緒になつて、資本家階級と鬪ふ事ことが婦人勞働者を解放する唯一の道である。

婦人消費組合協會便り

各組合へお手傳ひ

婦人消費組合協會が生れてから、各地の消費組合（購買組合を含む）に新らたな活氣が湧いたと云はれてゐます。

それはさうあらうと思ふのです。何と云つても消費組合の仕事（購買組合も）は、婦人の共鳴と協力がなくてはならぬのであるし、婦人こそ臺所と離れられぬ以上は運命的に、消費組合の仕事に深いつながりをもつてゐるのですから、さういふ婦人同志が敎へたり、敎へられたり、話し合つたり、聞き合つたりして行くやうに、この協會が各組合のお手傳ひをしてゆくやうになつたら、ど の組合も餘程家庭婦人に近づき易くなることゝ思はれますから。

やつぱり女は、女同志です。私共に出來ます事はどんなにでもお手傳いたしませう。どの組合でも利用して下さつていゝと思ふ。みんなで手分けをしてゆきますから。最近お手傳ひに行つたところは、金澤の協同組合、名古屋の購買組合。山梨の常永村の農民組合、北豊島協同組合、柏木勞友社等です。（電車賃、汽車賃その他の實費を頂戴します）

支部講習會を初めました

八月から、牛込支部と戸越支部とで洋服、手藝の講習會を初めました。北豊島協同組合では、この協會から講師を派遣しまして、大いに後援して講習會を初めました。外に、準備中の處も二三ヶ所あります。

婦人消費組合協會主催又は後援の講習會の特色は

ただに、技術の切り賣をするばかりでないといふこと（勿論營利事業ではない）目的を、婦人同志の親睦、協力、提携において一方で講習を進めるかたはら、一般の婦人が、消費

經濟方面の知識を多く持つことが出來るやうに、ポスター、講話、活動寫眞の集りをしたり、家庭問題、社會問題の茶話會をしたりして、絶えず最も實際的な方面から、家庭婦人の教育運動をつづけてゆくのであります。

おひ〳〵すぐれた技術をもつ共鳴者を殖やして行つて（進んでかういふ仕事に働きたい希望の婦人はどうぞ履歴書を添へてお申込み下さい）全國的に、組合や、婦人會やその他お手傳ひに上りたいと思つてゐます。

なほ、講習會は、回數劵制度にしました。一册、十五錢劵十枚綴り、ミシン裁縫は一回二枚（三十錢）、編物その他の手藝及び和服裁縫は、一回一枚（十五錢）といふ事にしました處、一般の講習會よりは大分格安なといふので好評です。その内の一部を支部基金に積み立て、あとを講師の報酬ときめました。

學校教育を奪取せよ

衣食住の一般について、學校ではいろ〳〵悉しい知識を敎へます。近頃の新聞や婦人雜誌も、可なりさういふ實用記事のために骨をおつて澤山に集めてゐます。

然し、ゆつくり學校の教育を受けられない者、貧しく忙しくて新聞も雜誌もよう讀まない婦人たちの生活にはその何れもが何のたしにもなつてゐない事は云ふまでもありません。

非常に實際にうとい學校の先生からほんやく流に敎へ込まれた家事科なんかが、ほんものゝ家事に就いた時に實際の役に立たぬことは想像以上です。

婦人消費組合協會は、普通に中流知識階級向きに紹介され、敎へられてゐる衣食住に關する一切の知識を、平易に嚙みくだいて、無産階級のおかみさんにも、百姓の女にも、直ちに理解し、應用が出來るやうに、紹介し直してゆかねばならぬと思つてゐます。又、われ〳〵の實際生活、社會の實際に立脚した新しい家政法を作り出してゆかねばならぬと思つてゐます。

洋食の講習會や、ミシンの使用法なんか、貧乏人の家庭に何の必要があろう、といふ批難もあるやうですが、貧乏人だから、いつも同じやうな煮しめしか作つてなら

ぬといふ法がどこにありませう。同一の材料でも扱ひ方一つで各種各樣の味ひが出て食膳は樂しみなものです。ミシンにしても、各軒に買ひ求める必要はありません。第一そんな事は出來もしません。そこは、婦人の共同財産にして、互ひに利用し合ふやうに協力一致すれば、高價な文化器具でもみんなで自分の生活に應用する事が出來るやうになりませう。いや、われ〳〵の生活になくてならぬ物或ひは利福をもたらす樣な文化器具類が、今の社會では、金子のある家庭だけしか使はれぬやうになつてゐることに對して、均等に現代の文明の恩惠に浴することの出來ぬ自分たちの境遇に腹を立てなくてはウソだと思ひます。その憤りが凝つて、私たちの社會改造に對する熱と元氣になるのでなければウソだと思ひます。

服地手藝材料品の取次販賣

各地各所で講習會をする樣になつて差あたり感ぜられることは、受講生のだれもが、材料をめい〳〵に買つてそれ〴〵小賣人にボラれてゐる！　といふ事でした「他人にボラれる金があつたら協會に下さい」私たちはかう思つて取次販賣を初めたのです。

但し、協會は、ボりません。成べく安くお取次ぎをしたいと思つて、取引さきを安くて確實なところにと努めてゐます。例へばある品を中間商人の問屋が一割儲けて小賣人が二割儲けるとしたら、協會は一割位の手數料で直接のお取次ぎをいたします。その一割も、經費を差引いたあとは協會の共同財産として積み立てられ、有用に生かして使はれるものであることは云ふまでもありません。

協會の經濟的基礎がよくかたまつて、いゝ仕事がどん〴〵出來ます樣、みなさんは、成べく協會で取次ぐものは協會から買ふ事にして、無益な利益を小賣人にとられてしまはぬやうにして下さい。（詳細は、協會に問合せて下さい）

全國的に家庭婦人の提携

支部は各區各地に散在して一般婦人のために御相談に應じたり、講習會を主催したり、その他、協會の活動の基礎單位をなすものです。やうやく、活動に入つたとこ

でろすが、細目に亘つての報告は來月號にゆづります。

全國的聯絡とは、婦人を消費經濟方面から自覺させてゆきたいとか、婦人の活動をさういふ方面から進めてゆきたいと考へられる組合や婦人團體やその他の機關と、全國を通じての聯絡提携をはかつて、つねに當面の婦人の問題について考へ合つてゆき、働き合つてゆきたいと思つてゐます。

共鳴團體も大分ありますから、將來われ〳〵の現實の經濟生活に立脚した全國的な婦人網が張つてゆけることゝ考へられて嬉しい。

その他

協會の定期集りは、毎月第二土曜日の後午二時から、五時まで。いつも事務所に於てでありますが、八、九の兩月の暑い内だけは麹町區内幸町、大阪ビル内智里硝石普及會の事務所でします。どなたでもお出下さい。(八月だけ、臨時に第三土曜に)秋風が訪れはじめたら、又消費經濟方面を主にした婦人講座を開きます。婦人消費組協の趣旨に共鳴して下さるほどの方は、ぜひ聽講して下さい。

研究調査部の活動も、隨分重要だと、みんなで云つてゐる所です。われ〳〵の消費生活の實際について、いろ〳〵調べてみたら、うつかりしてゐる間に消費してゐること、無駄な支出がどれ位い多いかしれませれ。おひ〳〵かういふ方面からも細かい活動に入りたいといつてゐます。

無論さうした具体的な日常の消費經濟を通して、現在の生産方法、社會組織の欠陥、獨占事業、政治と經濟關係などについて、どん〳〵、研究なり調査を進めて行きたいと思つて居ります。

その方面に興味を持つてゐらるゝ婦人は、單獨で研究なさるよりも、此機關を利用して、皆さんで一緒に研究なさるやうにして頂きたいと考へて居ります。

又此機關の爲めに好意のある方はいろんな方面の、研究材料、調査資料を提供して下さる事を御願みします。

自覺せる職業婦人は彼女自らを如何に考へるか！

山口正子

職業婦人研究家と自稱する某氏が去る六日の每夕紙上に發表した意見に對して、私は、一職業婦人としての體驗によつて得た考を述べて婦人の自覺を裏書したい。

現在の職業婦人は、一般に氏の黃色い目鏡でみた女性より、幾分といふよりはるかに自覺してゐる。成程、あのだう／＼と長い意見の中には、某氏の云つてゐる如き狀態にある婦人が全然ないとは云はぬ。卽ち某氏の新夫人の如く、月給四十圓で每日取りかへて來る洋服一枚がどれもこれも六十圓以上の金紗であるこ云へば、その附屬品も相當なものであらうとはうなづかれるであらうし、夫人の勤めてゐる○○商店で、外人ととかくの噂。(どこまで事實かしらないが）をされてる職業婦人も世の中には少なくない。(此のやうな個人問題にはふれなくてもよいが參考までに）

だから私は職業婦人は皆立派な人格者だ、某氏の云ふ如き婦人は一人もないと抗議するのではない。只、現在の社會思潮を少しも解さない某氏は、職業婦人研究家などとはおこがましいと思ふのです。

如何にして職業婦人が生れたか、を

わが身邊の記

むめお

うちの小犬が、私によくなついてゐる。子供までが、犬は、母ちやんが一等好きなんだと、きめてゐる。夜おそく私が外から歸つて來ても、朝でも、子供たちは、

『母ちやん、犬に顏をみせておやりよう』

とお催促である。犬は私にあごを撫でて貰つて如何にもうれしさうにころげ廻つて甘つたれる。

私が洗濯をしてゐると、背中におんぶして來る。下駄をはいて外へ出ると、裾のあたりを泥だらけにするまでぶらさがつて來る。机に向つて書き物でもしてゐると、膝さきから

考へれば、根本思想に於て誤りがあらうはづがない。それは經濟的の逼迫と男女同權思想の影響があると思ふ、(此男女同權思想によつてのみ職業婦人となつた人は少いが)

昔は一家の戸主が一日働いて妻子を充分養つて行かれたに反し、産業革命が資本主義をもたらして凡ての男子が賃銀奴隷となつてしまつた今日は、小さい時から工場通ひを强ひられる。冷い辨當を抱へて給仕に會社へ通ふ。かつ〲の月給をもらつて、やつと、年頃にもなれば少しは小ざつぱりしたそして美くしものを身にもつけたいと思ふ時、私共は何を與へられるだらう！『パンを求めて石を』といふ事がある通り過勞の末病氣になる、けんやくしても追つかない。此時に私共は何を敎へられるか！

氏は云ふかもしれない。『僕はそんな下層な職業婦人を指したのではない。少くとも智識階級に屬する婦人を指したのだ。』

と、然し悲しいかな、この層の婦人も同じ事、やつと親の細いすねをかじりながら都會といふ便利につれて學校は終へた、イブセンのノラに刺戟されて自由思想とか男女同權とかに青春の血をわかす婦人達は『社會は今までのきゆうくつな學校と違つてどんなに働き栄がある所かと一齊に職を求めてトー〲と街頭へ流れる。精巧な機械は、婦人子供の手で間にあふので一人前の男子の賃銀は物價に比して益々低下されて行く。その安い賃金は、一家總出で働かねばならぬやうに家庭に迫つて來る。(母親は別としても、或はかほそい内職などによつて外へ出なくとも。)

この樣な社會の荒浪にもまれて目覺めた職業婦人は、最早氏の云はれる樣なプチブル意識を持つた者は數ふるに足らぬ。某氏の言葉をこゝに引けば、

『職業婦人の欠點について云へば、餘りにも自己主義に偏してゐる事です。即ち自らが働いてゐるやうな考へを持ち働かせて貰つてゐるといふ觀念の乏

ぢいつとこちらを向いてみつめてゐる。そして私の眼とかち合ふと、急に、尻つぽを振り〱クン〱して來るのである。

まるで人間のやうだ、と、私は微笑ましくなる。

瀧ノ川協同組合の婦人會準備に應援のため婦人消費組合協會から四五人で出かけて行つたとき、組合員のある婦人が連れてゐらした四つ五つの男の兒が、すぐに赤松明子さんになついてうれしさうに抱かれてゐた。

『一番とつきつの悪さうな赤松さんに子供が一等早くなついて抱かれるなんて、子供つてわからないものねえ』

つて私が笑つたら

『でも、子供はいつだつて、私に一番なついて來るのよ』

と、赤松さんは、實例をあげて、いろ〱な場合に、如何に子供たちが自分になついてくるかに就いての御自慢をして、それからいふのであつた——きつと私は、一番餘計に

しい事、從つてそこには義理に於て欠け、人情に於て間然する所があります」云々又

『僅二三十圓位の給料しか貰つてゐぬ癖に、二等のパスで通勤して見たりする虚榮で、こゝに大きな弱點がありはしないでせうか。要するに分に應じ、その程度に適した（實際私達の働きに從つて利益を、資本家が私共に分ければおゝ私達はどんなにゆるやかな生活が出來るだらう！）生活なり服裝をしなければなりません。』

と、私共はこの記事を見た時に腹立しくも感じましたか、何とあはれな人だらう、現代に息して居るにはあまりに頭が古い氣の毒な人よ！　と思ひました。

職業婦人が資本家に對して『自分が働いてゐると云ふ意識は惡い、どこまでも働かしてもらふと考へなくてはいけない』と云つてゐます。此考方は封建時代―百年も前の考方であつて維新當時すでに世論が許さなくなつて、終に維新改革となりました。最早武士氣質はその價値を失つてゐたのでした。その意識や制度は、丁度異民族の首を取るのが男一人前の名譽であると考へてゐた野蕃人と同じ考へだから。

そこで第二の時代―武士階級に取つて變つたブルジョアジーがその金力によつて何事も壓迫しつゝ金をもうける時代、それは福澤翁か自由主義を唱へて金力萬能を鼓吹した時から近代の資本家がモーケホーダイの時代まで、然も今や第三時代、長い間かくれてゐた人間の本性がやうやく目覺めた大衆の時代であります。

そして次の時代―女性の時代に行くべき道程にある婦人大衆は、果して氏の云ふ如き舊道德感に生きようとしてゐるか？　私は直ちに否！　と答へる事にためらはないでせう。

それではどんな事を私共職業婦人は考へてゐるか？　かつては奴隷であり家來であり、雇人であつた職業婦人は今や協同者であるといふ考へをはつき

野人のもつ動物愛をもつてゐるのよ、子供は無心だから、それを感じてくれるんだわ――と。

人と人との交渉について、不愉快にこんがらかつたときや、一つ一つ、說明をしたり云ひわけをしたりしなければこちらのほんとうの氣持が分つて貰へない樣な場合に、人間つて、なんてまだるつこしいんだろうと、私はいつも思ふ。

人間のもつ小ざかしい知慧や感情やが、變にからみついて、邪推になり憶測になり、先入見となり、聞くときにも話すときにもほんとうの氣持は大抵ゆがめられ蔽はれて、中々に素直にそのまゝの姿には通らないものだ。

私のやうに、ぶつきら棒な物云ひしか出來ない人間、くどくどしい云ひわけや、お世辭のひどくきらいな者には、つけたりの修飾語――お世辭や、お體裁や、云ひわけや、まわりくどい云ひまわしを工合よく初めにしなければ――刺身のつまを上手にあしらはなけ

り握つた。資本があつたつて、又少數の資本家ばかりだつて、どうする事も出來ない。私共働く者があつて始めて仕事がなり立つのだ。それが奴隷や雇人や家來になる必要はない。凡ての責任、すべての權利、すべての利益は協働者の手にあるべきだ。しかし凡ての資本家は、利益と權利は自分一手に納めて、自分で失敗した責任は（モーケが少いといふ事ばかりでも）解雇といふ方法で責任を協働者である私共に押し付けるといふずるい心懸けです。（この樣な資本家に對して、私共は義理を立てる事が出來るでせうか！　人情を求める事に成功するだらうか！）

　長いものに卷かれろ主義の思想が決して正しいのではないといふ事をはつきり知つてゐるのが現在のあらゆる廣い意味での職業婦人です。とにかく氏の度々發表されるものは、現代世潮を認識せぬすさまじい意見であつて、永遠に婦人を奴隷視するくさりから離すまいとする意識的（或は無意識的）の行ひであり、その魂膽は、只古い頭の資本家におもねつて、自分のタイピスト養生所の商賣繁昌をねらふ反動廣告であるといふ事を看破するのは易しい事であります。この低級な廣告家に對して私共は絶對に反する意志をこゝに明かにするのであります。

　私共は職業婦人の利益、權利を守り、あはせて向上を計る目的にサラリーマン同盟に入り、又は職業婦人協會を設立して相互扶助の精神を涵養する事に心懸けてゐるのであります。そしてお互に力を合せて、不眞面目な男子、横暴な資本家をこらし知徳をみがく事に團結してゐます。

ればいけない人の世は煩さい。寂しい。

×

　電車に乘つてゐて、窓から、風にゆれてゐる草をみたとき、ふつと去年の夏青森で、あゝいふ風に吹かれ乍ら草に埋れて洗濯をしたなあとなつかしかつた。涯しらずの廣い〱高原であつた。もう秋草が花咲き揃つて、むらさきや白や、ふぢ色やとき色にとり〲に咲き亂れてゐた、すゝきも既に穗に出て月に話しかけてゐた。

「ママさん、なまじいに瓶の中なんかへ花をとつて來ては、こゝいらの花が死んぢまうわね」

　と云つて私は窓越しに草をながめ乍ら勞働服のママさんに話かけてゐた。やつぱり草だ。草が一等いゝ。私は草が一番すきであつた。今日も、疲れて、電信隊の草ぱらに、私はものを思はず立ちつくしてゐた。

×

ある會合で吉屋信子さんが、柳原白蓮さん

近頃聞た事ども

前田都宣子

北陸某縣下のある村の話であるが、此村は全くの禁酒村で、村境の辻々には、此村は禁酒村であるから、他の土地から御出での方は、酒類は勿論のこと飲酒に要する器具類一切の御携帶御遠慮下されたいと云ふ意味の立て札が有るさうである。

飲酒、禁酒といふことに就ての可否を彼是云ふのが私の此處での眼目では無いから省くが、私が一寸書いて見たいと思ひ付いたのは、其の一村が心をあはせて實行して居るといふ精神が實に美ましいと思つた點である。

其の村の戸數が一體どの位有るか知らないが、兎も角先祖傳來のいろ〳〵のしきたりを厳に守り度い老人達も無いでは有るまい。由來日本の生活様式の中にはどうも酒がなくてはならぬと云はれて居る場合がなか〳〵多い。何の己れが櫻かなばかりでは無い、祭事、佛事、親が死んでも、子供が生れても金が儲かつても損しても愉快不愉快何でもかんでも所謂「先づ一杯」をやり度いのである。

此村の老人達も、親代々やつて來た家の法事にも、村の豊作祝ひの御祭りにも、酒がない事は定めて淋しい事であらう。又働き盛りの村人達の間には一日のきつい野良仕事に疲れ果てゝ家に戻つて、箸とる夕餉の膳に向うてつけられた一本の德利がどんなにか慰めとなる人もあるであらう。けれども老若男女が心を協せて自分の慾を美事にかなぐり捨てゝ一つの善い事の爲に邁

への打あけ話——

『母親として子供が可愛いゝのは、あたり前のことですもの。それにあなたは、又しても、又しても、子供が可愛いゝといつも歌つてゐらつしやるものだから、わたし……柳原さんは、こんなにいつも子供が可愛いゝといふ歌ばかりうたひつゞけて——それで原稿料までかせいでゐらつしやるなんて、何て圖々しいんだらう、と、さう思つてますのよ、御めんなさい』……

然し、それについて白蓮さんの述懷を聞くと、貴族社會では、母子だから、きやうだいだからと云つて、一つ部屋に寢るでなし、甘つたれて抱いて貰へるでなし、その間の感情は非常によそ〳〵しいものださうであるからさういふ社會にづつと生ひ立つて來られた白蓮さんが、自分みづから子供に添乳をして、子供をあやしながら、うたを讀んだり、仕事をしたりしながら暮す現在の母親生活は私どもの想像も出來ないのであるらしい。さう聞

進する精神は、實に見上げたものではあるまいか。

それから此村では、單に禁酒村であるばかりでなく、村中のそれこれの仕事にすべて協同一致の精神の下に村人が參加するのであるといふ。

一例として、此村では村民に日々の天候を知らせる爲めに村の小高い丘の上へ信號旗の樣なものを樹てる規定があつて、毎朝これを樹てに行く者は青年團員であるが、彼等が行く時は、(天候のゆるす限り)、必ず草履をはいて行く此草履は、村の處女會員が家の仕事の暇々に作たものに限られて居るそうである等々々。

斯くの如くして村全體の福利の爲めに村民全體が協力する事を喜んで居るが、さて茲に到るまでには必ず何か原動力が無ければならないが、其原動力たるや、名も無い一婦人ー村の小學校の先生であるそうだ、而かも此隱れたる偉勳者は、自分の行て來た事、行ひつゝ有る事が人々知られる事を好まず問はれても容易に語らず、自分の名さへ秘して居るといふ。

於茲私は一つ二つ感じたのである。村民の犧牲的精神の協力。それから名さへ語るを好まないと云ふ婦人の孜々として村の爲め、村人の爲め、自ら行ひて範を示し此の模範村を作り上げたと云う隱れたる偉大な感化力と云はうか、德と云はうか！を考へる時、私は深く自分を省みて愧づかしい樣な氣がする。

之に引き換へて近頃私の近所に移つて來た家があるが、其の家の息子さん俄か雨でも降て來ると必ず二階へかけ上つて、窓から往來を眺めて居る、何の爲めかと思たら、雨具も無しに雨の降る中を濡れしよぼれて行く人達の困る姿を眺めるのが面白くてたまらないのだという。

そして此家族は、隣り近所と事を共にする事を好まない、兎角其處此處の誰彼とつまらぬ問題で爭て居るのを見

いて、私はさき頃、白蓮さんが、初めて宮崎さんの家へ來られた當時に、こんな狹苦しい汚ない家にずつと住めるかしら、と不安に思つたといふ事を、ある處に書いてゐられたことを思ひ出したのであつた。(宮崎さんの家は隨分廣々とした立派なものである)

それはとにかくして、母親が子供への思慕を書いてゐるものは、下手にしろ、上手にしろ、人を打つものである。そして人々は、批判拔きにその文章に溶けこんでしまつて、扨いゝ母心を持つた人だなあ、となつかしみ讃嘆するのである。

然し、いつまでも〳〵同じ所に低徊したまゝの私愛的な母心記錄を私は、近頃少しあき〳〵した。

文學としても、日本には未だ、ほんとうによく母心を描き出した作品がないやうに私に思はれる。丁度、よく、現代の女性を描き出した作品がないのと同じ樣に。

女の人が書いてゐる母心記錄も、どうも未

農村の婦人へ働きかける

佐久間貞子

かけたものも一度や二度ではない。

此二つの事象を私の頭に映し出して私は我々の消費組合運動に就てもしみ〴〵考へた。凡そ人間で消費者でない者はない。多く持ち多く消費する者、少く持ちて少く消費する者、更にまた少く持ちて多く消費させられる者、との差別こそいろ〳〵にあれ、何れにも消費はするのである其消費者がお互に精神的に、經濟的に目を醒まし合ひ、勵まし合ひ、如何にすれば無駄の無い生活、心地よい生活をする事が出來やうか、そして此の社會生活を眞に心地よいものとして歡び得る樣にする事が消費組合の一大眼目ではあるまいか、唯日用品の共同購入によりて我等の家計簿上の支出金額が幾らか低下した丈けでゝ、消費組合の使命を果されては居るまいと思ふ。前に擧げた村の小學校の先生の指導精神と、指導される村人の精神とは是非我々も持ち合せ度きものである。然らば後に擧げた、人の困るのを見て喜ぶ樣な隣人を如何にしたら一致協力の精神の中へ融和させる事が出來やうか、兎もすれば背を向け度がる人々を何時とはなしに此方向かせて、笑顔の一つも見せて貰うには少からぬ努力と忍耐を要するのであるが其處に亦我等の最も大きい使命が含まれてゐるであらう。

歸て來た九十九疋の羊より、歸て來ぬ唯一疋の羊のために主は心を煩し給ふた譬のやうに、迷へる友羊が無事に歸て來る事を心から禱らうではないか、そして歸て來た時の喜びを百疋で頒け合はうではないか。

精神經的で間口が狹く奥行きが淺くてその多くは私にものたりない。

×

正田淑子さんに會つて來た。讀賣新聞社の婦人代表投票に當選して、今度、ハワイの汎太平洋婦人會議に婦人勞働問題、職業婦人問題を擔當して出かけられる矢先きである。

實は、たび〳〵使ひの人が見えて、出立前にぜひ一度會つて職業婦人社の仕事について聞いてゆきたいとの事であつたが、いつもかけ違つて私は會へなかつた。しかも、それでは急いで會つてみやうといふ程の心にもなれないでゐた。

一體、私は、汎太平洋婦人會議に重要な意義をおかない。まして、代表として出馬して行つた婦人連中の出立前のあの騷々しさがいやだつた。をかしかつた。まるで田舍者が東京に出るか、軍人が戰にでも出る時のやうな業々しさとあの得意さ！

會議で取扱ふといふ問題は、婦人としては

婦人の消費經濟運動をお起しなさいますことを傳へ聞いて、嬉しさのあまりおたより申上げて徴意を表します。

實際、都會生活者が、日用品を買ふのに不當な暴利をとられてゐる事は私も痛感してゐました。去つて五六年を田舍にすごしてゐる私は、また、生產者の甚だしい不遇を彼らの血と汗がいかに安價に奪び去られてゐるかをみて憤懣の情消すよしもないのであります都會でも田舍でもの兩方の事情を知りつくして私はつく／＼考へさせられたのですが、こゝに兩者が結束して、生產者と消費者とが適當な指導者を中心にして手をつなぎ合つたなら、どんなに双方の利福を增すことが出來ることでせう！　ほんとに、一つの大きな團結の力さへあれば、たやすくこの惡制度を突きのけることが出來るのに、と思ふと口惜しくてなりません。

全く、生產者が、その勞賃が安すぎる事に苦しみつゝ祖先傳來の農業をさへ投げ捨てゝ出奔しなければならぬ事情につきおとされてゐる一方、日々勤勞の都會の人が、營養に必要な分すらとられない程に不當に高いものを買はされてゐる。丁度、消費者が一〇の支拂ひをすると假定するとき、それの生產者は一の收入しか得てない事情にあるのでありませんか。その間の九といふ差額は仲間に立つ數名のものにとられてゐるのでないのでないでせうか。

生產者ー仲買人ー田舍問屋ー都會問屋ー小賣人ー消費者へ』これらの澤山の中間商人の寄生虫を排して完全な消費者である婦人の組合を作つてゆくことは目下の急務であらうと考へられます。當地方の手近な例をお眼にかけますなら、

牛乳一合	一錢二厘
玉子百ヶ	廿錢
さやえんどう一貫目	四十錢
炭（どがま）一貫匁	卅五錢

これが生產者の得てゐる値段です。この中から經費を差引いたら、あとにどれだけ殘りませう。彼らは云つてゐま

みんな考へてみたい重要なものであつたけれど、日本の代表は、その問題とは大した關聯なしに一部の名流婦人の間でお互ひに割當てゝ、擔當して出かけた者が多いらしい。

會議の內容には兒童問題や、小學校教育問題や、その他、小學校教育に携つてゐる先生たちには考へて貰ひたい問題が澤山に含まれてゐるにもかゝはらず、教育に關係のある代表者は多かつたが、それは所謂學校屋さんばかりの様であつたから『小學校の女教員會あたりが默つてゐるといふ法はあるまい』と、そも／＼の初めに突ついたのが私であつた。とも云へる關係から、無視されてゐた女教員會からも代表が割込んでゆくことになつたと聞いた時は痛快であつた。然し、われも／＼と四人もの代表が結局出來てしまつたと聞いた時は全くなさけなかつた。

それに、平田さんまでがついて行く、と聞いた時、私はほんとうに腹を立てたのであつた。もう平田さんは一行に混つてハワイ行き

す。せめて、牛乳が一合二錢であつたらどんなによからうと。

（追伸） 私も近頃多忙のひま〳〵に手近かの婦人たちをたづねて婦人研究會を初めやうとしてゐます。ミシンも誰でも使用するやうにと提供しましたから、ボツ〳〵みえるやうになりました。もつといろ〳〵な方面に田舍に缺けてゐるものを次第に充たしてゆきたいものであります。

殊に、貧しい人の經濟と便利を圖り度、いつかお話をしました「かまど」を考案中です。

同時に、臺所改善の無盡を初めたいと思つてゐます。

村としての消費組合、利用組合、販賣組合等は、男子をも誘うてぜひその内起したいと、努めて人々に話しをすゝてゐます。どうぞ力もなく經驗もない私たちにみなさんでお力添へして下さい。

蠶界毒日

御田悠兒

お蠶（おかひこ）と呼んだ、お蠶樣とも崇めた。蠶神樣、蠶影神社、お稻荷樣など、養蠶を司る神樣として養蠶大衆——主としてその掌に當る女衆のいちぢるしい禮拜を受けた。單に養蠶に於いて順調であり、豊作であることを願ふ心理から、かくは蠶樣々々となり、更に蠶神樣となり、これを丁寧にとり扱ひ、おがんで拍手を求めたのであらうが、人によつてはそんな打算以上に、このいともいみじき糸を吐く小蟲を愛し、一匹の稚虫をふみつぶしてさへ、涙を

の船中に今、ゐるのであるが、惡坊に留守居をさせて、遙々尊い金子と時間とを太平洋の海に流しにゆくほとの餘裕を、平田さんはいつの間に獲得したのであらうか。馬鹿々々しい。今の日本には、もつと〳〵有效に金子と時間を使はねばならぬ個所が實に多いことを私は思ふ。

然し、今日、素直な氣持で私は正田さんに會はうといふ心になつた。そして、會つてよかつたと思ふた。正田さんは、病臥中にもかゝはらず擔任の問題についてはいろ〳〵人を派して調べたり、材料を集めたりしてゐられた樣だ。そして結果かういふ運動は、婦人の大衆運動にならねばならぬものだと信じてゐるといふことで、期待を今日以後の婦人運動にかけてゐられる。その理由から職業婦人社の仕事に深い關心をもつてゐて下さるものゝやうであつた。

それにしても、七年といふ長い間、ただ〳〵やりくりに追はれて、少しも建設的に働

流さんばかりにその過ちを詫びるのであつた。

ときにはこの蠶の唯一の食料である桑が、霜害やその他豫期しない障害から蠶に呉れることができなくなつた場合、或ひは蠶達の疾病が愈々重つてとてもこのまゝ飼つても見込みが立たないと云ふ場合には、主として水葬或ひは土葬にするのであるが、そんなとき別れの哀しみはいかばかりであらう。

その養蠶業が、今では副業の域を脱してこの國隨一の産業となり、農民は從つて日本人の大部分はこの細い細い糸にすがつて生活を保つことになつた

今や往年のやうな純朴さを以つてこのいみじき小蟲を禮拜するものは稀れになつたが、今年の蠶を當てたい、いや當てさせて貰はなくてはと、全く打算づくの稲荷詣りが殖えて行く。他方技術の進歩に伴つて、近頃の蠶飼ひは皆當てるやうになつた、産繭の量は増加はおびただしい。

だが考へて見るまでもなく、生産の過程に於いては斷念し、技術も進歩して、多くとりいれた繭を、いざ製糸家の手に渡す場合には、果してどれだけの考慮、どれだけの打算が費されたかあれほどまでに心ぱいを盡し手だてを盡して穫たのに肝心な金に代へると云ふ場合の餘りにいきぢなさよ。

中にはみがきなどよくして、上手に立廻つて、隣家よりも幾分いゝ値で手離すものもあつたか知れない。しかし全體として、團結してどれだけの行動や施設がなされたか！

養蠶組合はある、お互によい繭を少ない生産費で安全に多くとることには一番でつくしてゐる、だが一歩を進めて多量に有利に生產した繭を金子に代へる段取りになるとべちやんこであるもつとも、さういふ努力が全然盡されてゐない、わけではない組合製糸はそれの著しい現れであり、乾繭倉庫もあれば、共同販賣もある、しかし、それらがどれだけの實蹟を收めてゐるか、よし實蹟は問はないにしても、どれだ

いてゆけなかつた、すぎ越し方をしみ〲と思ふ。どうやら、近頃やつと、前に踏み出ず一歩二歩の準備がそろつた様である。多くの共鳴者の力添へで、これからこそ自分達の仕事は形をなして進んでゆけさうに思はれる。

×

七月十九日に金澤市に行つた。產業組合大會に婦人と消費經濟の講演をしに行つたのであるが、あとで購買組合に婦人會を組織したいといふ事で、土地の婦人がたと懇談をとげた。

『金澤は非常に退嬰的な土地ですから、十人も集つたら上々と思つてほしい』との主催者側の豫想をうまく〱裏切つて、澤山に、しつかりした婦人が集つて、どし〲話しかけて下さつたので嬉しかつた。

金澤の家庭に、こんないゝ婦人がからして澤山に——きつとこの外にだつて澤山にあろう——かくれてだまつてコツコツと働いてゐるのです。この婦人の力を、購買組合の事業

け組合精神を生かしてゐるか。

しかしそれらのことは問ふだけ野暮なんだ、どうせ資本家政府のおせつかいででき頭をおさへられてゐる組合であるもの。よい繭を少ない生產資本閥によい繭を少ない代金で容易に提供し得る道理、して見るとこんな奬勵すべき組合はない、だが、それを一步進めてより高く賣りたいこなると、それは組合を作らせた主旨を乘越すことになるから決して喜ばない、だがその場合世間態を憚つてつとめて去勢された狀態に於いてそれをすゝめるまでなのだ

資本家政府の奬勵し支配する天下り的養蠶組合はそのやうであれ、眞に養蠶業者の自覺に基づく下から自治的な組合であれば、よい品を少ない手數でより多く生產するのは勿論のこと、更に進んで製糸資本閥の魔の手を振り切つて、少なくとも生產費以下では斷じて手離さないために最善がつくされるであらう、すなはち新しく起されるであらう養蠶家組合は、生產よりも販賣對策の上に主力が注がれるであらう、從つて鬪爭的な經濟團體として現れるであらう。

お蠶樣よと、蠶影神社に祈願して、みのりみごとに小山のやうにつまれた繭、その肉をそぎ汗の結晶として得た繭の顏も一夜限りの見納めで、それがいざ市に運ばれて、金に代へられた後の腹立しさよ。その若干の札束は忽ちにして右へ左へ、曰く肥料代、曰く桑畑の年貢、村稅、まてよ馬の稅金、自轉車の稅金、蠶室の稅金さては米の代金、魚やの拂ひ、蠶種屋の拂ひ、藥やの拂ひ、日用の雜貨のつけ掛け、無盡掛！　駄目だ〳〵。とてゝ引張り足りない、そこへ子供等は小遣をねだるし女衆は着物の心配だ、どうしたらいゝのか。

町の小料理屋はそれらなけなしの札束を懷にした身心疲れに疲れたる荒くれ男をのせて、要心深く少しばかりを或はやけ三昧のへべれけに飮ませてしまふ。

に歸つて來ないで十年も放つておいたなんて何て怠慢だつたでせう、と、私は當事者の人に恨みをのべた。

しつかりした婦人が澤山で發企人になつて下さつただけに、金澤の會はきつとうまく發展してゆくことゝ信じられるのであるが、此處だけに限らぬ、ほんとうに澤山の、すぐれた立派な婦人が一つの家庭にかくれてコツコツと働いてゐるのだと思ふと、社會的には少しも生きて働かぬその力が惜しい。

私のねがひが無線で全國の家庭に通じてくれるなら、私は、聲を揚げて叫びたい。家庭をもつとよく切り盛りして行くためにも、社會をもつと住みよくしてゆくためにも、婦人が今のまゝに一人ひとり閉ぢこもつてゐたんではその仕事の力が生きて働かない。婦人たちは、穴から出て生活改善、社會改造のために早く協力しやうでありませんか、と。

新居

中河幹子

おこたりのしみてわびしきあけくれや庭には栗の花散りにつつ

曇り日の空の下びに咲きゆるゝ栗の白花うらめづらしき

いそがしき仕事もちながらひねもすを庭に坐りて芝植ゑにけり

庭芝に交る雑草ぬきにつつこだはるこころなしといはなくに

×

夕巷人あししけき中にして乳房もめる女をわれは見にけり

子をば叱る母人をみつつ何か羨し子を失ひし親とはなりて

子を失ひ深きなげきにゐし人も今やはむなししみて思ほゆ　（木下利玄氏の遺作をよみて）

八月の婦人雜誌を見る

全龍寺百合子

この暑いのに、見ただけでもむつと來る厖大(ばうだい)な流行の婦人雜誌をのべつ〻けに讀むと云ふ事は並大抵の事でない。まさに白粉攻めのがうもんと云つた態である。が、一方から考へれば先頃婦人界で喧しい問題になつた性的記事問題が、どんな風な反影を婦人雜誌の上に投げてゐるか、一抹の興味がないでもない。正直に云へば資本主義萬能の世の中に頗る心細い望みであるが、さうした氣持の轉換に力點でも置かなければ、全く耳を擽る氣になれない。

いや憎れ口はこれ位にして、兎にも角にもと思つて、最先に取上げたのが『主婦之友』である。依例例のやうなハミガキの廣告見たやうな表に『内職副業實驗號』と銘打つてある。此處では性問題を內職と云ふ實利主義に轉換へたのかな、といふ印象である。が婦人雜誌に『私は何圓の資本で、年何百圓、何千圓の收入を得た』と云つた風な記事は年中行事で、別に新事實でもない。

見開きにの寫眞版にはこれも此頃の婦人雜誌につきものゝ節子姫が載つてゐる。

卷頭其他を飾つてゐる御定連の長編小說に付ては後でひつくるめて敬意を拂ふ事にして だらだらつと耳を擽つて見る、いかにも無自覺な貧乏人種が羨しがりさうなブルヂョア婦人の邦窩と處々に客間(サロン)だのホテルだの自動車だの外交官だの伯爵だの云ふ活字の出てゐるのも見ただけ恐入つて引下る。

『戀愛必勝の秘決百ケ條』は通俗的な記事らしいが、成程この心得を必要とする人々が讀者なのかと考へさゝれる。戀愛のやうなデリケートな問題を、こうした處世術式な常識の形式に當はめて批評して行く事に根本的な疑問がないでもないが、安價無反省な戀愛沙汰の多い折柄、滿更無駄の事でもないかも知れぬ。

內職と副業の記事は本誌の中心讀物らしいが、犬を飼つたり、小鳥を飼つたりして、こうラクラクと金が儲るものか、特種の場合、特種の事情さうした條件がそれぞれの場合に入りはしないか。出來るなれば專門家の批判なり、失敗者の經驗なりを次號にでも入れる事だ。

相變らず、性病の藥の廣告が滿載されてゐるのは、先頃の女流諸家の抗議もこゝ迄は藥の利目がないらしい。つまり諸家の抗議も性病藥のフパロカンダに負けたわけだ。

『婦女界』は、人も知るやうにその賣上部數

に於て、『主婦之友』とは婦人雑誌界の双璧である。從つて、その内容も似たりも似たり花白葛、表紙いや表題を取換へたらどちらがど**ちらだか解らない位だが一寸見た處 皆**の廣告が『主婦之友』程、目立たないのと、御総ひの方に、ほんの申譯け的ではあるが、『婦人界時評』『内外時事短評』のあるのは稍高級な感じがする。子供洋服誌上展覽會、これは文句なし、中産階級の婦人には有益な記事だらう。小説欄は拔きにして、第二讀物らしい「近代戀愛座談會」は一向近代らしくないでないか。誰もが、たか〳〵不良少年程度の智識で、近代と銘打つて戀愛を談してゐるのだから、救はれない。銀座の舗頭を化物のやうな格構をして歩いてゐる女、何處の女學校にも——とりわけ都會では——十人や二十人は居るだらうと想像される不良の徒、さうした連中にショウウインウドに並んでゐる流行の洋服や着物を着せて、それが近代の世相だと思つてゐるのが、そも〳〵間違ひである、一歩突込んで云へば、單なる性的興味に婦人**を見やうとしないブルヂョアー思想にその根本的な缺陷**があると思ふ。

一座の中で三上氏が、この人としては珍しく『一般のモダンボーイなんてものは世紀末の殘骸ですね。……文學的とか思想的では十年も十五年も前に叫ばれた、一種の刹那な主義とか、享樂主義とか云ふ……時代後れのものが形式だけ現代化されてゐるので、モダンと云ひますが、案外古いのぢやないかと思ふ。……』と云はれるが、同感である。

虐げられた婦人大衆の中には、火のやうな新しい信念が燃えてゐる事を時代は知らなければならない、マルクスボーイ、マルクスガールなどは過渡的な現象の先端として、世間の視聽を集めてゐるに過ぎないとも云へやう。たゞ我々が見逃してはならない事は、それ等の資本主義廢頽期に於る表面的現象の蔭に默々として、次の時代の文化を形造る婦人大衆によつて、自ら別個の性道德が建設され**つゝある事である。**

『婦人倶樂部』目次をづつと見渡す。如何にも鷹澤山、節子姫の記事を初め、忠國愛國、神様、佛様、結婚、戀愛、美容、家事、いやはや、婦人百科全書と云ふ格であるが、婦百科全書はとうが立つてゐる如く、とうの立つた内容である。時代と云ふものゝない婦人、社會と云ふ背景のない婦人對手に明治婦人節用と云つた風の編輯振りは、それだけ他の流行婦人雑誌のやうなデモ近代的灰汁どさはないだけいゝかも知れない。中に『優しき愛の手に理想郷を築いた處女の力』と云ふ記事に農村婦人の事を書いてゐるが、此誌がこうした實際記事見をつけたのは婦人雑誌の下落期としていゝ事とだと思ふ。

『婦人世界』は編者の不注意から見落してしまつたが、店頭で眺めた印象は『夏休利用號』

となつてゐるだけに可もなし不可もない女學生式乃至女學生が袴を脫いだばかりの新細君式の淡い感じである。

『婦人の友』は流石に教育家として有名な羽仁もと子女史が兎に角永年一定の主張のもとに出してゐるだけに、他誌に比して一種の上品さと、健實さが感じられる『土と愛に生きる兄弟村』の記事なんか、此誌のさうした嚮さを裏書する氣持のいゝ讀物と云へやう。文藝物なんかに一種のリファインされた感じが出てゐる。此雜誌なんかこそ、自由主義的を立場で結構だから、もつと社會記事を入れてはどうか。婦人に關係のある社會時評とか、一般的な時事問題の解說位は入れてもよささうなものだ。全紙を擧げてプチ・ブルヂヨア的趣味に陶醉してゐるらしのは遺憾な事だ。

『婦人公論』が此頃月並の婦人雜誌になつた事は、かへすがへすも遺憾な事だ。營業政策でやむ得ない事は解り切つてゐるが、あの中途半端の態度が。進むか退くかと云ふ岐路に立つた場合、寧ろ進んでほしかつた。現在のやうな狀態では、所謂流行雜誌と斷定するには、もつと退く事を餘儀なくされはしないか！然も、さうする事によつて、多年その方面でしにせた海千山千の流行雜誌の地盤に果して食込む事が出來るかどうか頗る疑はしい。

八月號は問題の秩父宮と節子姫號になつてゐて、殆んど全紙の三分の一をその爲に費してゐるが、これは敬意を拂つて、引下る事にする。

次に讀物になつてゐるらし『田中首相の見舞金事件』は事件そのものがあらずもがな出來事であるだけも同誌としてもあらずもかなの感しがする。ナンセンス物語と云ふ欄があるが時別に欄を設ける迄もなく、全誌をナンセンス物語で埋めてゐるやう氣が氣がする。メカホン型のセーラーパンツに膝切のワンピース夜の銀座をララ、ララてな口笛を吹いて歩いてゐる人達の物語雜誌だと思へば間違ひはない。婦人公論と云ふよりも、ナンセンス公論と云つた事が適當かも知れない。

いづれにしても天下の婦人公論が斷髮をしてラッパズボンの戀人を見附けるやうになつたのは時勢の然らしむる處か、プルヂョアかプロレタリアーか、時代はその中間的存在を認めなくなつて行くところに世相の恐しい推移を見る事が出來る。

之を要するに、全然營利本位の立場に立つてゐる婦人雜誌に、風敎を害するとか、時代的關心を持たなすぎるとか、云ふ批難は、條の違つた文句かも知れないが、反動內閣と云はれてゐる政友會內閣でさへ、婦選を云々する時代に、十年一月の如く『如何にして夫の心を捕へるとか』『戀愛の成功法』など云つた風の赤本張りの記事で讀者の興味を釣らうとするのは、營業政策から見ても、それ自身墓

穴を掘りつゝあるのではないか。あれだけの大資本をかけて居るのであるから、單に眼先を更へると云ふだけでも、もう少し新時代に對する冒險的飛躍をして見てはどうかと思ふ。

雜誌の中心讀物である連載小說に付いても同樣の事が云ひ得やう。現在の通俗小說黄金時代は寧ろ投機的な一時の現象で、いゝ氣になつて、いつまでも不如歸の浪さんを斷髪にして見たり、金色夜叉のお宮を洋裝させる位の事で納つてゐては、時代の推移と云ふ大きなしつぺえ返に手も足もなくなりはしないかなあにまだ〳〵と云つてゐる中に、平家は壇の浦で亡びてしまつた。

讀者の婦人に就いて云へば、婦人がなぜ世の中からこう蔑視され、不幸な生活に押し潰されてゐるかと云へば、貴女方が、あの無內容な、卑俗な讀書に溺れきつてゐるからと答へるより仕方がない。全體として、婦人の立場社會の生活を考へないで『私はこうして金を拵へた』とか『どうして夫の愛を得た』かと云つた風のたわいもない讀物に無中になつて個々の立場、個々の家庭より外に、何物も考へないやうな生活は、結局個々の立場も個々の家庭も幸福にするものでないと云ふ事を切實に考へてほしい。

書くだけの事を書いてしまつたが、豫定の頁が餘つたやうであるから、少し條が違つてしまふが、世間の所謂プロレタリア作家と云ふ人たちへの注文でも書く事にする。

兎に角何と云つても雜誌では婦人雜誌がその發行部數では大衆的と云はうか最も一般的に讀まれてゐるのであるから、プロレタリア作家たちが眞に大衆を對手にものを云はうと思ふなら、たかゞ千や二千のデモ前衞分子程度のプロ文學青年ばかりを相手にしないで、どんどん婦人雜誌へ喰込んで行つてはどうか。ブルヂヨア文學の滅亡などと大きな聲で喚いても、婦人雜誌と云ふ婦人雜誌が今のやうな狀態ではそんな事を云つていゝ氣になつてゐる方が間違ひではあるまいか。

尤も現在のプロ作家の作風では一般の婦人などはてんで依り付けないが、それだからといつて、御前さんたちはブルジョアだと云つて一しうしてしまうのは考へものだ。同じやうにブルジョアの生活を畫いたつていくらも新時代的の取扱方はあるであらうし、殊に婦人雜誌向のシナリオなんか、いくらも取扱方があると思ふ。と云つた處で問屋が下さないぢやないかと云ふかも知れないが、先樣は名前が有名であるとか、目先が變つてゐるとかして賣れさへすればいいんだ、此頃ではプロ作家だつて所謂一流所二流所がある筈だ。さうした人から先づどし〳〵手をつけて貰つたら自然後進にも道が開かれる筈だと思ふ。

◆◆◆

烙印されたる苦艱（七）

（ある婦人革命家の一生）

ヴェラ・フィグネル 手記
大竹せい 抄譯

暗殺計畫

「人民の意志」黨の委員會は、理論と組織の仕事を了つて、いよ〳〵實行運動に移ることゝなり、クリミヤからペテルブルグへ歸る××にむかつて、途中三ヶ所で暗殺をする計畫をたてた。モスクワ、ハリコフ、オデッサへおの〳〵數名の代表者が配置された。暗殺はいづれもダイナマイトをもつてすることになつてゐた。けれども委員會はその場所と手段は、代表者自身が、その時の情況によつて變更することをゆるした。だが、またこの計畫の實行者たちには、お互ひに他の暗殺計畫の場所と手段は知らさないやうに組織された。それと同時に委員會はペテルブルグへ冬宮爆破の計畫をすゝめてゐたが、それは同志たちの間にも嚴秘になつてゐた。それを取り扱つてゐたのは三人の機密委員ア・ミハイロフ、チホミロフ、それからクヴヤトコフスキーであつた。ある時、クヴヤトコフスキーは謎のやうに言つた。

「いろ〳〵な準備が行はれてゐるが、その中で一切をかたづけ得るのはある一人の勇士だ」

それは後に冬宮に潜入して爆破をくはだてたハルトウリンのことであつた。私は、はじめ暗殺計畫の實行者のうちへ加

へられてはゐなかつた。それが不滿でならなかつたので、その計畫のどれかに參加させてくれるやうにせがんだ。その結果、委員會は、私にダイナマイトをあたへオデッサへ派遣した。そこで私は本部の仕事を、その頃ボベレヂスカヤといふ名で活動してゐた妹のエヴゲニヤに托して去つた。エウゲニヤは不注意にもボベレヂスカヤの名でかなり廣い交際をしてゐたのを、私は知らなかつたため、彼女をクヴャトコフスキーのゐる本部へ同居させた。それから足がついて一八七九の末に彼女とクヴャトコフスキーは捕縛された。そして一八八〇年にクヴャトコフスキーは死刑にされ、彼女は流刑に處せられた。

本部からはダイナマイトと口火と書類が發見された。書類は搜索の際にクヴャトコフスキーの手で火中に投ぜられたが灰にならないうちに引出された。警察は、書類を手に入れたが、これを解讀することは出來なかつた。クヴャトコフスキーはそれについて一言も口を開かなかつたので、そのために殺された。その書類の中には一枚の地圖があり、その一點に十の印が附されてゐた。一八八〇年二月五日の冬宮爆破のあとで、警察はその地圖が冬宮の地圖で十印しの書き込まれた點は爆破する場所と定められた食堂だといふことを知つた。食堂には××の全家族が集まるので、その機會をとらへて爆破することになつてゐたのである。

私は、ダイナマイトを受けとつて九月の初旬までにオデッサへ行つた。そこで適當な借家を求めて同志のニコライ・キバリチチと一緒にイワニッキーといふ變名で、一家をかまへた。間もなくコロドケヴイチ、フロレンコ、更にすこし經てレベデワ女史がやつて來た。

それなら誰かを鐵道番人に住み込ませる必要があるといふことになつて、私が八方奔走した結果、フロレンコをオデッサから十三露里ばかり離れた小驛の番人に住み込ませ、レベデワ女史がフロレンコの妻といふことに裝ひ、ダイナマイトもそこへ移した。ところが間もなく、ゴリデンベルグがやつて來て、××はモスクワを通過するチャンスが一番多いが、モスクワにあるダイナマイトの量が足りないといふので、われ〱の手にあるダイナマイトの一部を持つて行つた。が、彼は途中エリザベトグラードで捕縛された。

間もなく私達は××がオデッサを通過しないといふことを知つたので一部の者はそこを引き揚げた。列車は、ハリコフを通過すると聞いた。そこではアレキサンドロフスキー市の近くで爆破が行はれる計畫になつてゐた。實行者としてはジエリャボフ、ヤキーモワ女史、それから勞働者オクラドスキーが任命されてゐた。が、失敗した。ダイナマイトは枕木の下にしかけて、長く原のかなたにまで導火線を引いて、××の列車が通過する時、連中は部署に着いてゐたが、爆破は起らなかつた。口火の取りつけかたが誤まつてゐたので、發火しなかつたのである。

第三の地點、モスクワ・クルスカヤ鐵道ではモスコウ郊外の小驛の近くの一軒の家の中から仕かけてあつた。十一月十九日の豫定の時間に二つの列車が相次でやつて來た。その家の主婦になつてゐたソフイヤ・ペロフスカヤ女史の第一のあいづに際して、ステパン・シリヤエフは電導線を接合しなかつた。

列車は無事通過してしまつた。第二の信號で――第二の列車は爆破された。が、××は第一の列車に乘つて居て、第二の列車には從者だけが乘つてゐた。だからこの爆破は失敗であつた。けれどもこの出來ごとは全ロシアに非常な衝動をあたへ、また全ヨーロッパでも非常な反響をおこした。

〰〰〰〰〰〰〰〰

秋になつてペテルブルグで、私たちの有力な人々が相次いで失はれた。クヴャトコフスキーが死刑にされ。それからシリヤエフその他も同樣。更に『人民の意志』黨の秘密印刷所が襲擊された時、勇敢に武力をもつて反抗した結果、そこで指導者になつてゐるブタシカは殺され、四人はつかまへられた。

（つゞく）



（第二回職業婦人茶話會の集りの一部です）

職業婦人協會にお入り下さい！

職業婦人協會が生れました。

職業について働いてゐられる方は、ぜひこの團體に加つて下さい。ひとりびとりの力は弱く、頼り少ないものですけれど、いゝ團體につながりを持つといふことは、どんなにうれしく、力強く、はげましになることでありませう。

婦人のいゝ團體がほしい、とは長い間の私たちの、いや、廣く一般婦人の心からねがいでありました。

上つ調子でない、たゞちに私たちの經濟生活を擁護し、特に職業婦人としての私たちの力になり、頼みになるやうないゝ團體に育てあげませう――だつて、私たちさへその氣になつてつとめたら、必ず成るんですもの、やりませうよ、やりませうよ、と――熱心に、澤山の若い職業婦人か集りよつて來たのです。

職業婦人協會にお入り下さい。

協會は、さしあたり、一、互助共愛の心から、お互ひに會費として毎月廿錢宛出し合つて積み立てゝゐます。これは、會員の病氣、失職、結婚、その他の吉凶時に協會から一定の金額を差上げるのです。二、職業相談もします。婦人の職業生活の御紹介も、御手引も、何でもお力になります。三、毎月の茶話會、これは一ケ月に一度宛します。ぜひ誘ひ合つて出かけて下さい。當分は映畫會、研究會、講話會、童謡會、などを兼ねてすることにしてゐます。四、二週間に一度位の音樂會もすることになつてゐます。講師は中村準助氏。聲樂、セロ、マンドリンを習ひたい人はお申込み下さい。（事務所・牛込區市谷本村町四）



太陽の馬

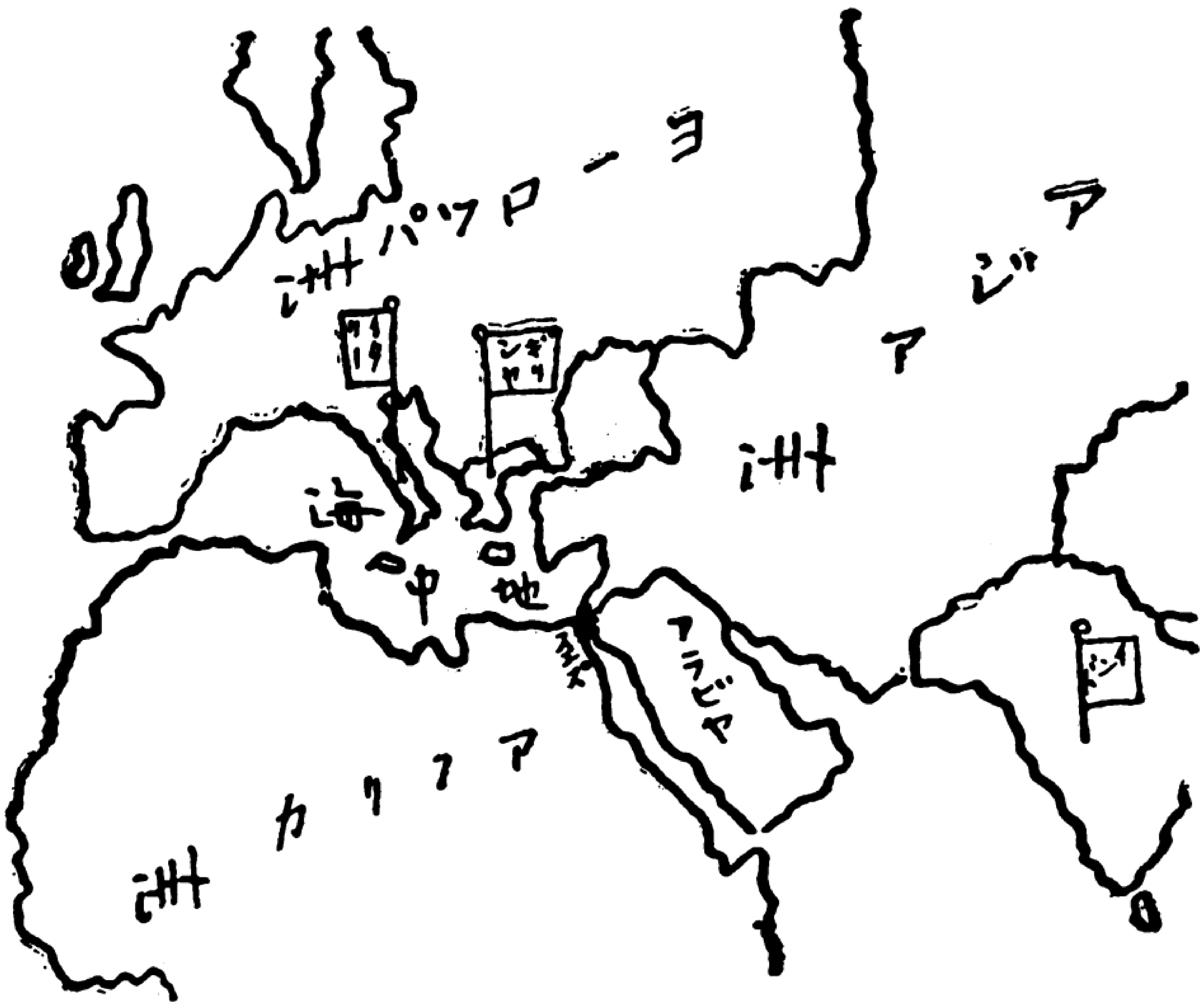
（ギリシヤの昔話）

村山文子

けふはギリシヤと云ふ國の昔話をしませう。

まづ、ギリシヤとは一體どこにある國なのでせうか？さがしてみませうね。さあ、地圖を出して下さい。

いゝですか。これが世界の地圖ですよ。太平洋と書いてあるところに、細長い島がありませう。えゝ、それがあたし達のお國——日本なのですよ。それからずつと左の方を見ていらつしやい。支那があつたでせう。印度もありましたか。さう〳〵、その三角形の大きな半島ですね。もつと〳〵左の方に、丁度アジア洲とヨーロツパ洲と分れる所がありますね。それからも少し下の方に、とても大きな半島が突出て居ませう。それがアラビヤ半島



です。あのアラビヤンナイトと云ふ不思議な、魔法使やなんかのお話を思ひ出したでせう。そのアラビヤの半島が袋の口の様に細くなつて、切れかけて居るところが、有名な運河のあるスエズの地峡です。そして、そこからアフリカ洲につながつて居るのです。

こゝまで來ると、このアジア洲と、ヨーロツパ洲と、も一つアフリカ洲と、三つの大陸に抱かれた細長い海が見つかるでせう。さうです。その海が、地中海と云ふのです。

さて、その地中海の北の岸に……ほら、見つかつたでせう。長靴形にとび出して居るイタリーの右どなりの半島！ これが、今迄さがして居りましたギリシャの國なのです。

やつと見つかりましたね。ごくらうさま。

それではこれから、この國の大昔のお話をしませうね。

ギリシャの人は、いろんなおもしろいお話をどつさ

り持つて居りました。これは、その中の一つなのです。

大昔の大昔、この世の中に、まだ、人間がそんなに澤山住んで居なかつた頃のこと。アフリカのはてに、フエートンと云はれる一人の子供が、お母さんと一緒に住んで居ました。

フエートンは、まだ一度も側に行つてみた事はないのでしたが、フエートンのお父様は、太陽の神のアポロでありました。あのえらい、まぶしいお日様が、フエートンのお父様だつたのですから、フエートンは、どんなに自慢しても追付かない位だと思つて居りました。

朝毎に、はてもない森の向ふから、まぶしくつて見てゐられないやうな、光つた金の車に乘つて、アポロが空をころがつてゆくのを、何時までも〳〵フエートンは見つめてゐました。そして、何とかしてお父様の側に行つてお話をしたくてたまらないのでした。

或日のこと、お母さんは、フエートンに

『フエートンや、お前の大きくなつた様子をお父様にお目にかけていらつしやい。お父様が毎朝お出ましになる旭の御殿は、さう大してむづかしくなく探されるでせうから……。そしたらどんなにか、お父様もお喜びになるでせう』

とおつしやいました。

フエートンは、思はずおどり上る位大喜びをいたしました。そこですぐに、お母様にこしらへていたゞいたお辨當やお菓子を持つて、元氣よく東の方をさして——ずつと〳〵東へ〳〵と——旭の國へ向つて出かけました。

やがて、たう〳〵旭の御殿の建つて居る高い山に着きました。大きな岩があつたり、今にもすべりさうな深い〳〵谷があつたり、ずゐぶんとけはしい道でしたけれどフエートンは、元氣な子供でしたから、けつして恐れないで、一生懸命になつてよじ上つて行きましたら、まあ目の前にきれいな〳〵お家が建つて居ました。御殿は金と寶石で飾られて、キラ〳〵かゞやいて大きな銀の扉には、神々や、人間や、町や、又、何だか名前も知れないいろんな海の動物などがほりつけてありました。

フエートンは、その美しさに驚きながらも、ずん〳〵

と御殿の中に入つて行きました。
　お父樣のアポロは、一目ですぐと分りました。紫の衣をきて、寶石でキラ〳〵かゞやく玉座にすわつて居るアポロのまはりには、『時間』や、『日』や、『月』や、『季節』や『年』などが、大勢立つて居りました。そのまぶしい事と云つたら、フエートンはあんまり光がつよくて寄りつけないので、立ち止つてお目をこすつてばかり居ました。と、お父樣のアポロにはすぐと分つたと見えて、
『おや、フエートンぢやないか。どうしたかい』
　と、やさしくおたづねになりました。フエートンは、胸をどき〳〵させながら、
『はい、たゞお父樣の子であると云つていたゞきたいばかりに……』
　と申しますと、アポロは頭のまはりにつけてゐた輝く日光をとりはづして、嬉しさうに、
『こちらへお出で、かはいゝ息子』
　と云ひました。
　フエートンは夢中でかけよつてお父樣にとびつきました。お父樣もまた、かたく抱きしめて、フエートンのおつむをなでながら
『さあ、何でも欲しいものを上げるから、何か云つてごらん』
　と仰言いました。
ヌエートンは、何をおねだりしやうかしらと考へて居りましたが、さう〳〵、今まで何度となく、お父さまがもへる太陽の馬を御して、天をお進みになるのを、見はつて居た事を思ひ出しましたので、すぐに、
『どうぞ、一日でいゝから、お父樣のお馬を私に使はせて下さい。おねがひはそれだけです』
　と叫びました。
　アポロはこの叫びを聞くと困つてしまつて、力なく頭を振りながらかう申しました。
『フエートンや、これはお前にはあぶないのだから、どうか他のものを云つておくれ。ゼウス程えらい者はないと云はれて居るのであるが、そのゼウスでさへも、私

の火の車を走らせることは出來ない位むづかしいのだ。きまつた道について行く事がむづかしいので、はじめのうちは、大變にけはしくつて、馬が出たてゞ元氣のよい時でさへも、なか〳〵そこを上る事が出來ないのだ。それが朝だ。中程――晝になると、大變高くなつて私でさへも、下を見ると、とき〴〵目がまはつて來る位なのだよ。しまいの夕方になると、急に深い海に落ちこんで馬のかけ出すのをひかへる事が出來なくなつて來る。なほその他に、天はひつきりなしにぐる〳〵まはつて居るし、また星にそれ〴〵目じるしのある、あの恐ろしい動物の中を通り抜けなければならない。大牛の角やライオンのあごや、さそりだの、蟹だのゝ荒々しい爪などの間を通らなければならないし、その外にもまた、いろ〳〵な恐ろしい動物の中を通らなければならないので馬はこんな動物を見ると、はねをどつてあがくよ。これを押へることは、私には中々骨が折れる位だから、フエートンよ、そんなことはよしてお吳れ。かへつて罰を受けるやうなものだからね」

アポロは、このむかふみずなおもひつきを止めさせやうとして、いろ〳〵なだめたり、すかしたりしましたがフエートンは、お父樣の云ふ事を聞かなかつたのみか、なほも、あの車を走らせたらどんなにか立派だらうとそればかり思つて居りました。そして、とにかく、太陽の神さまともあらうものが、一度約束したことを破る筈がないと思つて、なほもしつこく、

『お父樣、私はほかのものは何もほしくないのです』

と云ひ切りました。

そこでアポロはしぶ〳〵ながら、しかたなく、もう何も云はないで高い金色の車の置いてある部屋にこの可愛い向ふみずな子供を連れて行きました。フエートンは嬉しくて〳〵たまりません。あちらこちらと、車を見まはつて居ますと、そのうちに夜明の女神が來て、東の紫の戸をあけました。星はみんな順々に進み出て、一番しまひに明の明星が出て行きました。

空と地とは赤くなつて來ました。すると、アポロは、



ポセイドンとその戰車の繪

氣早な『時間』に云ひつけて『太陽の馬』を引出させましたが、馬はとびはねて、はげしい息をしながらうまやから出て來ました。車に馬をつけてしまふと、アポロはフエートンの顏に魔法の水をちよつとつけますと、もう少しもこのもえ上るほのほを、熱いとは思ひませんでした。それからアポロは、フエートンの顏のまはりに輝かしい日光の冠をつけました。

『さあ、フエートンや、馬をしつかりひかえておいで。決してむちをつかつてはいけないよ。早すぎる程かけるのだからね。車のあとをみてよくそれについて行くといゝ。あまり低いところを行くと地に火をつけるし、あまり高い所を行くと、星をやくからよく氣をつけてね。さあ手綱のここを持つのだよ』

と、アポロが云ひました。フエートンは車にとび乘つて、手綱を取つて、心から喜んでお父さまのアポロにお禮をして出かけました。

馬はまつしぐらに、雲の中に突き進みました。車はアポロが乘つたのやうに重くはなかつたので、馬は

『これはいつもとは大分違ふなあ』

と考へました。ちやうどからつぽのお船が、波にもまれてゐるやうに、馬は空中ではねまはりました。そしてやたらにかけ出して道でないところをはねまはるので、フエートンはどつちに馬を向けていゝのか分りませんでした。さうかと云つて馬を止める事も出來ません。馬ははじめに北の方に行つてしまつたゝめに、そこに居る大熊と小熊は熱のために、あつくてたまらなかつたので大洋にとびこまうとしましたし、北極にとぐろをまいてゐる大蛇は、身をといて苦しい息をしながら、頭を上げ出しました。

フエートンは下を見下しました。足の下にずつと遠いところに『大地』がありましたが、それも小さくて見えるか見えない位でした。フエートンは、あんまりおそろしくて、青くなつてしまひました。膝はぶる／＼ふるへますし、どうしていゝのか分らなくなつて、はじめて、『太陽の馬』などに手を出さなければよかつたと、後悔

しましたが、もはやどうする事も出來ません。遠く西を見たりまた振り返つて東の方を見たりして、どうなる事かと心配で〳〵たまりません。

その時、大きなさそりが、そのおそろしい爪を、フエートンの方へのばして尾を打つたので、あまりのこわさに氣を失つたフエートンは、そのまゝ手綱を落してしまひました。それで馬はこれまでだあれも行つたことのないところへかけ出してしまひました。空の上の方へかけ上つたり、また地のほとんど近くまでかけ下りたりするのでした。月は、自分の車よりも下の方を走つて居る太陽を見て驚いてしまひました。草や木や畑の作物は、殘らず燒けてしまひました。大きな町も滅びてしまいました。世界はすつかり火事を起したのです。河は熱のためにわきかへり、ナイル河はこの時から砂漠になつてしまひました。地面には割目が出來て、その割目が地獄へまでも、光がとゞいたさうです。海の神のポセイドンは熱に耐へる事が出來なくて、水の中から三度手を出してまた三度沈みました。そのとき、母の『大地』は、額に手をあてゝいかにもこわさうにぶる〳〵ふるへながら、ゼウスに救ひを求めました。

ゼウスは、アポロを始め他の神々を呼びあつめて相談して世界を救ふことにしました。

もうこの時には、雲は燒きつくされて、地上に送る雨は少しもありませんでしたが、ゼウスは晴れた空から雷を鳴らして、フエートンをねらつて光の矢を放ちました。アッと云ふ間もなく、あはれにもこの荒つぽい子供は車からまつさかさまに落ちて、その長い黄色い毛はもえてちやうど、星の落ちるやうに落ちてゆきました。そしてフエートンは大きな川の中に落ちこんで、たう〳〵波の下にかくれてしまひました。

これでやうやつと、世界はすくはれる事が出來ました。

けれども、アポロはその翌日は一日中顔をかくして子供のために泣きくらしました。そのためにその日は世界中全くのくらやみで少しの光もなかつたと申します。

（をはり）

編輯室より

毎月雜誌の出來上りがおくれるので、至るところでいろ〳〵にひやかされます。然しちやうど、朝寢をして、朝めしがおくれると、自然に晝めしも遲くれ、晩めしまでもおくれやすいものであるやうに、一旦、月末に上るべき發行がおくれたとなると、中々常態に戻りにくいものであります。

然し、それでも今月は印刷屋でもヘビーをかけて貰つたので餘程早く出來上りました。來月はもつと早く、おそくも月末には出來ませう。そして次の月には二十五日頃までに、その又次には二十日すぎにはお手許に屆けるといふ事になれば、それで、初めて雜誌として、以前の額で世間がわたられるやうになるのであります。

◇

この八月は、月初めに浦和へ二日間ゆきます。産業組合の婦人會の人たちと消費經濟方面のはなしを話合ふためであります。それから、北豐島協同組合の宣傳デーが四日にあります。十日から、秋田の角館、仙臺にゆきます。いろ〳〵な用むきをかねてゐますが、地味な經濟方面の運動をコツ〳〵してゐらつしやる方々のお仕事を、成べく廣く見せて頂いて來やうと樂しみにしてゐます。

宮城縣にはこの雜誌の讀者が大分ゐられますので、ぜひお會ひして語りたいものです。何れ、係りの者から日程をお送りしますが、おくり合せの上、御面談の機會を作つてほしいものです。

地方に行つたとき、お互ひに知らなかつた共鳴者やわれ〳〵の仕事の後援者にお目にかゝるのが出來るのは私に何より嬉しいことであります。

◇

今月から、村山さんに雜誌の發行人になつていたゞきました。富士さんは『猫』の中で奧さん處の涼しさうな少女さんと云つてゐられるけれど、とにかく村山さんが丁年以上であることは雜誌の發行人であることが許されてあるのに見ても解りませう。

落し物、忘れ物の上手なことで天才(?)と云はれてゐる私が、何かにつけて村山さんから叱られたり、小言くつたり注意されたりしてゐるほど、落つきのある、しつかりした、而も求知心の強い村山さんですから、大丈夫發行日の如きも、あと三四ケ月をまたずして世間なみにして下さる事と信じられます、私はもと通り編輯に携はります。（む）

この雜誌の購讀者を三倍にする計畫に御加勢下さい。もう一息といふ所です。どうぞあなたのお友だちに本誌をすゝめて下さい。

現代の婦人は全部『婦人運動』をよむところまで漕ぎつけませう。

◇誌代はすべて前納にして下さい。

前納誌代

壹部　貳拾五錢（本號に限り郵稅五厘）
半年部　壹圓四十錢
壹年分　貳圓八十錢

送金法

送金は振替が一番便利です。誌代の受取證は別に出しません。雜誌の發送を以てこれに代へます。

昭和三年八月五日納本
昭和三年八月八日發行

東京市牛込市ケ谷本村町四
編輯發行兼印刷者　村山文子

東京市牛込市ケ谷本村町四
發行所　職業婦人社
振替東京六四一六〇番

東京市小石川久堅町八九
印刷所　共働印刷所

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和三年八月五日 印刷納本
昭和三年八月六日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動 第六巻 第七號 （定價二十五錢）